

Popper Letters

ポパーレター:日本ポパー哲学研究会会報

1992

Vol. 4, No. 2

日本ポパー哲学研究会事務局

(1992年11月号)

内容

ページ

ポパー京都賞受賞記念ワークショップ特集

- | | | | |
|---|---------------------------------|-------|---|
| 1 | 九十歳のポパー | 神野慧一郎 | 2 |
| 2 | ポパーのイメージ — 京都賞受賞記念ワークショップを聴いて — | 蔭山泰之 | 5 |
| 3 | ワークショップに参加して | 小河原 誠 | 7 |

第3回年次研究大会「開かれた社会の思想的基盤」より

- | | | | |
|---|----------------------|-------|----|
| 4 | ポパー哲学と「開かれた社会」(基調報告) | 浜井 修 | 9 |
| 5 | 討論を終えて | 小河原 誠 | 13 |

寄稿論文

- | | | | |
|---|---------------------------------|------|----|
| 6 | ポパーの注視点 — 方法論の本質主義批判と方法論的個人主義 — | 杉田秀一 | 15 |
|---|---------------------------------|------|----|

書評など

- | | | | |
|---|------------------------|------|----|
| 7 | J. ワトキンス著、中才敏郎訳『科学と懐疑』 | 中才敏郎 | 18 |
| 8 | 訳者による新著紹介 | 橋本 努 | 20 |

文献目録

- | | | | |
|---|-----------|------|----|
| 9 | ポパー研究文献目録 | 井上一夫 | 22 |
|---|-----------|------|----|

議事録等

- | | |
|------------------|----|
| 運営委員会議事録 | 29 |
| 会員総会報告 | 29 |
| 1991年度会計報告 | 30 |
| 新入会者・退会者および住所変更者 | 31 |

その他(雑記)

- | | | |
|---------------------------|------|----|
| 'PRAGMATIC INCONSISTENCY' | 嶋津 格 | 14 |
| 閉じた社会 | 嶋津 格 | 21 |

本年1992年11月上旬、ボバーが再び来日した。稲盛財団の京都賞を受賞するためである。授賞式とそれに関する行事は、京都の国際会議場で十一月十日から十二日まで、3日にわたって催された。ボバーは九十歳とも思えない元気さで日程をこなしていた。

彼のこの来日に関して、随筆めいたものをという事務局の依頼があり、ここにいささか雑事を綴る次第である。私は今や、この国では、彼のたった一人の直弟子ということになるらしい。もちろん、不肖の弟子である。

ボバーがはじめて日本を訪れたのは、1963年だそうである。その時は、しかし、彼は東京に来ただけで、関西の方は訪れなかった。私はそのころにはすでにボバーのもとで研究することに決めていたはずなので、もし彼が日本へ来たことを知っていたら、東京のセミナーに出かけたことであろう。しかし、私はこの機会を逸した。私ははじめてボバーに出会ったのは同年の9月であったが、場所は東京ではない。今と異なり当時は、情報はそんなに早く伝わらなかったのである。まして、その当時大学院生に過ぎなかった私には、残念ながらそうした情報は、しかるべき時に入ってこなかった。あとでボバーから、東京での議論は大変おもしろかった、と聞いた。

ブリチッシュ・カウンシル・スカラシップをえた私は、1963年の9月からロンドン大学のL.S.E.で勉強できることになり、彼の研究室に挨拶に出かけた。私は、そこで初めて彼の警咳に接し、そして1年間彼のもとで勉強することとなった。

当時のL.S.E.には、リーダーとしてJ.ウオトキンスとJ.O.ウイズダムが、講師としてI.ラカトシュ、助手としてA.マスグレーヴがいた。そしてボバーのセミナーは、マリノウスキー以来最も活気のあるものだ、と言われていた。マリノウスキーもかつてL.S.E.で教鞭をとった学者である。ついでに言えば、その当時の社会学には、E.ゲルナーが人気を集めており、彼の授業を聞く学生は、エソテリックな雰囲気さえ醸していた。もっともゲルナーの講義には女子学生が圧倒的に多かった。

私がボバーについてまず言いたいことは、彼は教育家だ、ということである。多くの弟子に背かれた形になっている彼についてこのように言えば、奇妙に聞こえるかもしれないが、私は自分の経験からそう思う。元来、本当の教師というものは弟子を持たないものである。本当の教師にとっては、弟子を持つことよりも真理が大切なのである。近世哲学の基礎を築いたデカルトは、弟子を持たなかった。ヒュームやカントでもそうではないか。しかし、人々は後で彼らの説を解釈しようとして騒ぐ。しかし、解釈の試みがあるということは、彼らの哲学が理解されていないことを意味するであろう。

L.S.E.での私の経験は、すこし屈折したものである。何回かボバーと会ううちに彼は、私に、ここで博士論文を書いてはどうか、と言ってくれた。一方で私は、とてもそんなことはできそうではないと思ったが、他方、心の底ではかすかにその気がうごいた。その気がうごいたのにはすこし理由があった。というのは、私はかねてから知り合いであった故武田弘道教授に頼まれて、ボバーに、武田教授の贈り物を届けたのであるが、ボバーは武田教授への礼状の中で私のことに触れ、「前途有為の青年研究者であると見受けるので、自分のところで学位を取る気になってくれることを望む」と書き送っていたのである。武田教授はわざわざその写しを作って私にところへ送ってきてくれていた。それで、私はボ

パーが私に言ったことは、すこしは本気なのかもしれない、と思ったのである。

ポパーの言ってくれたことが本気であったにせよなかったにせよ、私が前途有為であるという彼の推測は外れ、反証された、と言わなくてはなるまい。私は、以来何ほどのこともしていないのであるから。そして、学位論文の件も、L.S.E.のポパーやウォトキンスらの強力な推薦にもかかわらず、もう一年スカラシップを延長できなかったのも、問題外のこととなってしまった。再び余計なことを言えば、当時は、日本を出る時に、最高200ドルしか外貨が持ち出せなかった時代なのである。自費で海外に滞在するというようなことは、普通では、考えられなかった。日本が今のような経済大国になるなどは、ほとんど誰にも夢想だにできないことであった。当時は1ポンドが1008円もした。

自分のことを書くのは億劫であるが、しかし、私を通してポパーのことを語ろうとすれば、それはある程度やむを得ないことでもあろう。ご勘弁願いたい。私が言いたかったのは、ポパーは、人（学生）をその気にさせて勉強に駆り立てる、教育者としての素質の豊かな人だ、ということである。そして、柄の悪い表現をすれば、私は人参を鼻の先にぶら下げられた競走馬だったのである。しかし、私はこれをむしろ感謝の念を込めて言っているつもりでなので、誤解しないで頂きたい。そして、ポパーのこの同じ資質が、時にセミナーでの発表者に対する攻撃的とも言える批判となった、と私は考える。教師が本気になって議論しないでは、学生も本気になって議論しないであろう。それに彼は常によりよきものを目指していた。子供のころ南極や北極の探険家になりたかったという彼は、常によりよきものを目指す懐疑的（探究的）楽観主義者でもあった。教育者としての彼のその素質は、果然、今回京都でも発揮された。

今回の授賞式の関連行事として、3日目の12日の午後には、各受賞者を交えてそれぞれのワークショップがもたれた。各ワークショップの形式は、まず受賞者の講演があり、次いで何人かの発表者が、それぞれの受賞者の学説、ないし研究に関係のある報告をし、その後質疑応答をするという形式である。ポパーのその報告者は4名であり、私もその一員であった。各報告者は前もって英文と邦文の原稿を提出させられていた。

さて、ワークショップに先立って関係者だけの昼食会があった。その私の席にポパーがやって来て、「おまえはバートリについて書いたか」と尋ねた。肯定すると、ここにはkのイニシシアルで始まる名前の人が多いのと言いながら、まず私の論文について批評を始めた。お前の論文はなかなか良いが、自分（ポパー）の批判的合理主義は、理論や提題ではなく、態度 attitude なのだとすることをもっと強調せよ、と彼はまず言った。それから話をバートリのことに移した。「バートリは、このことを理解しないばかりか、挙げ句の果てに、demarcation の問題はずまらないと言いつつ出したんだ。私の哲学からこの問題を除いたらどうなると思うか。それはお前もわかるだろう」、とポパーは私に言った。「お前は、私がバートリと喧嘩別れをした例の学会のことを言いたいかもしれない。しかし、批判には二種類ある。バートリは議論の上での批判でなく、個人に関する批判を自分に向けた」。「しかし、自分はバートリが優れた学者であると思うし、なによりも、自分は彼が好きである。彼が病気になるまで苦しんでいた時には三日にあげず電話をした」。

自分のペーパーを読む前に批評されていささか面食らったが、教育者としてのポパーの面目なお躍如たるものがある、と私は感じた。私が彼のもと学生であるということもあろうが、私の書き物を発表前に読んで、こまごまといろんなことを言ってくれる彼には、も

ちろん、感謝せずにはおれなかった。だが彼が教育者の情熱を見せたのはこれだけではない。

このワークショップでは、私はもとポパーの弟子であると言うので、彼のすぐ右横に座を指定された（左横は通訳の人）。総合司会の長尾教授の計らいによるものである。それで私はポパーの顔ばかりでなく様子がつぶさに見えた。ところで、最初の発表者である竹内教授は、その発表の中で、個人主義に対するある批判を始められた。私は、これははと思ってポパーの顔を見やると、はたせるかな彼の顔が次第に紅潮してくるのが見てとれた。どうなるかなと思出すと、私はもうそれからの竹内教授のお話は、あまり耳に入らなくなってしまった。竹内教授の発表中にポパーは、自分も発言の機会を与えられるか、と私に尋ねた。私は、そう思う、と答えた。竹内教授のお話が済むと、ポパーは、私に向かって発言してよいか、と重ねて問いかけてきた。私は、総合司会の長尾教授にその意志を取り次ぎ、結局、第二番目の発表者である私の話の終わったところで、ポパーに発言してもらおうこととなった。彼の発言で、会場は盛り上がった。しかし、私は、その盛り上がりよりも、少しでも自分の気にそまない議論は見逃さないポパーに再び30年前と同じ教育者精神の発揚を見て、それに感動した。というのもこの日、彼はかなり疲れていたようで、自分のペーパーさえ全部は自分で読まず、長尾教授が大方を代読するという形をとったのだからである。発言を始めたポパーは、まさに物申すと言うけんまくで、それまでの彼とは別人のように力強い調子で議論を展開した。

ワークショップのあと、立食での晩餐会があった。その席で私が竹内教授と話をしていると、ポパーはやって来て竹内教授と先程の議論について話しを始めた。私は少し敬遠気味に横に立っているとポパーは、私の袖をぐいと強く引っ張って、一緒に聞けと言うのである。この歳で、この気迫。いささか恐れいった。

宴もたけなわを過ぎ、人々は少しずつ減り始め、ふと気がつく、ポパーも帰途につこうとし玄関の方に向かって歩いていく。私は後を追って彼と別れの握手をした。しばらく握っていた後、彼が少し力を入れてきたので、こちらも力を入れ返すと、彼は更に力を入れてきた。その力強さを私は今なお感ずる。おそらくこれが互いに相見る最後であろう。この握手も、そして私がなんとか発表を終わって演台から降りてきた時に彼が見せた嬉しそうな顔も、教育者としての彼の演出であったかもしれない。しかし、私は彼の秘書の旦那さん（夫婦でずうっとポパーに付いていおり、ワークショップの時はポパーの真後ろにいた）が私に言ってくれた言葉を盾に、ポパーはあの時ほんとうに喜んでいたのである、と思うことにしている。つまり、彼のそうした振る舞いは、演出ではなく教育者としての彼の素地がそのような形で出たのである、と。

原稿募集

ポパー・レターVol.5, No.1に載せる論説、新著紹介、近況報告、その他の原稿をお寄せ下さい（93年5月発行予定）。

できるだけワープロで、そのまま切り貼りできるように打ち出していただければ、助か

ります。2行にするのが手間であれば、半分の幅で、細長く打ち出していただければ結構です。分量は適宜。

その他次号には、93年度年次大会（テーマ「社会科学におけるポパー哲学の応用可能性」）向けの、報告予定者の論考が載る予定です。ご期待下さい。（嶋津）

ポパーのイメージ —京都賞受賞記念ワークショップを聴いて—

蔭山泰之

これまで、カール・ライムント・ポパーという人物について、写真や著作物を通してしか知ることがなかった私は、自分の思想形成に多大な影響を与え続けてきたこの人物を、今回の京都賞のワークショップで直接目にする事ができるといって、いくらか興奮気味であった。

二階席から会場に入った時は、ワークショップは始まったばかりであった。演壇から遠かったためと、ある先入観のために、初めのうちはポパーの居どころを見つけることができなかった。

やがてポパーの業績紹介が終わると、ポパー自身の講演になり、丁度演壇の真ん前の席に座っていた老人が立上り、演壇に回って原稿を読みはじめた。この時点で、私はある種の現実を忘れていたことを思い知らされた。私が、ポパーの写真や著作をとおして抱いていた彼のイメージは、まさしく胸をはって自信に満ちた闘う哲学者、ある種ごう慢に感じられるほど好戦的で、迫力、量感、ともに申し分のない闘神のような人物像であった。ところが、演壇で座っているポパーは、背中の丸い、語気の和らかいごくふつうの老人であった。考えてみればポパーはもう90才である。これは、ふつうならとっくの昔に引退しているはずの年齢である。ワークショップにおいて、ポパーの迫力に満ちた力強い講演が聞けるものと思い込んでいた私は、ここで、自分勝手なイメージを抱いて若干興奮気味になっていた自分の浅はかさをいくぶん悔いることになった。たしかに演壇の真ん前の席にかなり高齢に見える老人がいたことは会場に入った時から分かっていたが、それがポパーその人であるとは。

ポパーはあいさつ程度原稿を読み上げると、講演の内容の朗読を別の担当者に任せてしまっ

た。ポパー自身のアドリブの生の討論をも期待していた私にとって、もうこうなると、ポパーのイメージをどのように再構成すべきであろうか。歴史上の哲学者の思想内容に関するイメージはともかく、その人自身のイメージは、よほどのことがない限り、修正を迫られることはない。その本人に会うことができないからである。しかし、まずいことに私は若いころのポパーを写真でしか見たことがない。生のポパーは老人になってしまっている。

こんなことを考えているうちに、私はあることに気が付いた。ふつう偉大な哲学者の長年の業績をたたえる今回のような会合では、いわゆる学派とでもよべるような関を形成する若手が多数集まる。たとえば、もしヘーゲルやマルクスが今日まで生きていて、来日するようなことでもあれば、その筋の哲学研究家たちが多数集まって、もっと盛大なものになっていただろう。寡聞にしてほかの思想家が来日した際のことは余りよく知らないが、ポパーほどの数々の榮譽に輝いている大哲学者なら、京都賞のワークショップもさぞや盛大なものになるだろう。これもまた勝手な思い込みかもしれないが、しかし、今回のワークショップでポパーを出迎えた人々は、期待していたよりも少なかった。少なくとも名誉ある賞の受賞記念にしては、決して多くはなかったように思う。しかもそのなかでも哲学を専門とする人もまた少なかった。大哲学者にしては、いくらかさみしくはないか。

しかし私は、これこそポパーにとって正常な形態であると改めて認識した。日本にはポパー派とでも呼べるような哲学の一派はないのだ。ないというよりもむしろ、ポパーの主義主張を正確に理解している者は、あえて学派などを形成しないように十分気を付けているのではないか。かつてポパーは、トーマス・クーンの唱えた通常科学なるものの存在を認めつつも、それを科学の発展にとって極めて危険な存在であると批判したことがある。哲学においては、そのような通常科学は、偉大なる開祖とそのエピソード

一ネンからなる、いわゆる何々学派に当たるであろう。その主張内容はどうか、現実には学派はある一定の規模になると、ただその存在感のためにほかへの影響力が増してくる。そしてその影響力のためにその存在感が増してくるという妙な循環に陥ると、その組織は急速に自己発展の能力を失ってしまう。偉大なる開祖が別格扱いされ、学派内での批判が難しくなるからだ。たとえ批判するものが現れても、彼は修正主義として排除される運命にある。

このような事態は、ポパーのもっとも警戒するところである。おそらく地元ヨーロッパでもポパーは、学派を形成するような動きには十分警戒しているであろう。学派が形成されるということは、彼にとっては自らの敗北を意味する。だからポパーは、決して自分の主義主張をご神託のようにたれ述べることはしない。「批判的態度は、一度は採るに値するとよいものです。ぜひあなたも採ることをお進めます。」という旨の彼の言葉は、先生が弟子に対してたれる教えというには程遠いものがある。いわゆる批判的合理主義とは、決して一枚岩の哲学の学派ではなく、教条主義と闘うレジスタンスの総称である。それゆえ、ポパーの真意を理解しない人たちだけでなく、十分に理解している人たちも、ポパーの主張を全面的に受け入れることはしないのである。たとえある組織がポパー派と呼ばれ、ある人が批判的合理主義者と呼ばれることがあっても、それは通常の意味での学派とは本質的に異なるのである。それはやはり、「私は間違っているかもしれない。あなたが正しいのかもしれない。しかし協力すればわれわれは、真理により近づくことができるだろう」という考えに共鳴した人々の集団であると思う。長いものにはまかれろ式の考え方がいまだにはびこっている日本では、このような集団は希少な存在ではないだろうか。

ポパーは初めから、哲学体系を作り上げてそれを支持する学派を形成しようなどというけちな考えは、はなから持ち合わせていなかっただ

ろう。彼の人生は、哲学という狭い分野にこだわらない、人間の知的、実践的活動が直面する問題に対する回答の試みとその批判的吟味であったといえる。哲学そのものよりもむしろ、人間の、人類のよりよき方向への発展を望んできたポパーにとって、それゆえ哲学の分野以外の人々も多数今回彼を出迎えてくれたことは、むしろ喜ばしいことであつたのではないだろうか。

このように考えるてみると、ポパーはどれほど高齢になっていようとも、やはり私がイメージしていたとおりのポパーであつた。講演の後のワークショップでのポパーの、自らの課題に対して答えようとし、また発言しようとする態度は、年齢という物理的な制約を受けつつも、やはりその思想は確かに生きていて感じさせるものがあつた。ポパーはやはり今でも闘っているのである。

パソコン通信網 について

前号にも載りましたが、以下の会員は、
NIFTY-Serve
のIDを持っていて、相互に通信が可能です。

他にも同ネット・ワークに入っておられる方は、お知らせ下さい。

原稿の送受信以外にも、ここで討論を行って、(筒井康隆風に)そのまま原稿にすることも可能です。

蔭山泰之 HDA02206
小河原誠 GBD01747
小林傳司 PED02022
嶋津 格 HAG00235
橋本 努 GGD00505

(嶋津宛のポバ・レター原稿も、これを通して送って下さって結構です。)

ワークショップに 参加して

小河原誠

ワークショップ当日における私の発表は、時間の制約もあって全文を読み上げるものとはならなかったが、前以てプリントが配ってあったはずなので、言わんとすることだけは伝わったのではないと思う。私自身としては、できるだけポパーの思想に沿うように話をしたつもりなので、ポパーが「根本のところでは一致している」というようなコメントを付けてくれたことに対しては、むしろ当然と受けとめている。

私自身が、ポパーのフィディズムに言及したことに対して、ポパーから「批判には限界があるということとどこで述べているか」という問いかけがあった。「ポパーは、どこでもそうしたことは述べていないし、また、論理的にはすべての言明は批判可能である」というのが私の返答であった。またこれとの関連で、ポパーは、合理性は態度 (attitude) の問題であると強調しておられたが、私は、当日返答したように、これはこれで正しいとは思ふものの、合理的態度そのものの正当化に関してポパーは『開かれた社会とその敵』の第24章では、フィディステックな態度をとっていたと思う。換言すれば、彼は、合理的態度そのものを正当化しなければならぬという正当化主義的文脈にいたわけで、その中で正当化は不可能であると言って「理性への非合理的信仰」を主張したのだと思う。

他方で、ポパーのフィディステックな傾向は、基礎言明の受容の問題に関しても現われていると思う。基礎言明の受容は、彼にとっては、少なくとも『科学的発見の論理』の段階では、決断あるいは規約の問題になっていると思う。目下のところ、私は、この問題は、「問題のなさ (unproblematicity)」という概念を導入することによって、克服されるのではないかと考

えている。ある基礎言明が unproblematic であるとは、その基礎言明に対する批判言明が科学の世界において確立していないということであろう。言葉を換えると、unproblematic な基礎言明は、背景知を構成している諸言明と整合的であればよいのであって、「決断」とか「規約」によって支援されるとか正当化される必要のないものであろう。このように考えた方が、ポパーの客観的知識の理論に即応するのではないだろうか。したがって、私は、ポパーの思想発展を視野に収め、かつ、客観的知識の理論を真正面から受けとめるならば、ポパーにはフィディステックな傾向があったものの、彼の思想の全体のなかで見れば、それは克服されていると言えると思う。

ところで、言明を受容することを「決断」とか「規約」とは考えない立場に立つと、「言明の合理的な保持」とはなにかという厄介な問題に逢着するが、CCR 論争を扱った近刊の拙著（『討論的理性批判の冒険』、未来社）で、この問題に十分踏み込むことができなかったのは遺憾である。

ところで、ここに触れた問題は、ワークショップの席上では、神野慧一郎氏がCCR 論争の一端に触れられてバートリー批判を述べられたときに、間接的ながら、言及されたものであった。ポパーは、神野氏がバートリーに触れられたことでかなり興奮したように見えた。氏へのコメントのなかで、ポパーは、バートリーが優秀な学生であったことは認めたものの、バートリーの立場については好意的なことは述べなかったと思う。さらに、彼らのあいだの論争の出発点になった1965年の論争について、ポパーがバートリーのことを感情的なレベルで批判する — 私にはそう聞こえた — ようなことを述べたのは私にはよく理解できないことであった。当時、バートリーはポパーに対する個人攻撃のようなものをしたのであろうか。私が、1965年の論争のときポパーの隣に座っていたというハティアンガディから聞いた話では、ポパーは背

を向けて去って行ってしまったということだ。この辺の事情についても、私は先に言及した自分の本で、記録された文書からできるだけ正確に再構成したつもりであるが、今回ポパーの話を書いて自分の基本的な所見を変えるには至らなかった。むしろ、ポパーは、彼自身の過去、歴史上の人物としての「ポパー」ときちんと対決していないのではないのだろうか、90歳という現時点の目で過去を再構成し過ぎているのではないだろうか、という印象を私はもったくらいである。もっとも、誰にせよ、十分長く生きれば過去を変質させることはありうることだが。

しかしながら、ポパーの話を書いた後、かなり経ってから思い当たったのは、ポパーが、合理性の問題を態度の問題として強調したことであった。私は、当日の席上でも述べたように記憶するが、合理性の問題が態度の問題であることは、CCR論争のなかで（『コミットメントへの退却』第2版に収められているAppendix 4を見よ）、バートリーもまた認めているところであって、このこと自体は、ことさら強調するまでもないことだと思っていた。ところが、1965年当時に遡ってポパーの側に身をおいてみると、彼が態度ということを経験することを十分な意味があると思えてきた。というのも、1965年の論争では、バートリーは合理性の問題を境界設定の問題として提出していたからだ。つまり、彼は、合理性は、態度ではなく、言明の問題であると考えていたのだ。（もちろん、私は自分の本のなかではこの点を指摘し、同時にバートリーが後年「態度の問題である」ことを強調していると述べておいたが、拙著の論調が全体としてバートリー・サイドに立っていることは否定すべくもない。ついでに述べておくと、合理性の問題は、「態度の問題である」と言いきるだけで片づくものではないし、ポパーの境界設定論で扱いきれる問題でもない。バートリーの批判はこの点を明かにしている。）バートリーの議論に対して、ポパーは先に触れた第24章の立場を守っていたのではないだろうか。繰り

返すが、ポパーにとっては、合理性の問題とは、言明の経験的性格になぞらえられて捉えられた「言明の合理性」の問題ではなかったということだろう。ポパー・サイドからは、状況が私の見たもの — 拙著を参照していただきたい — とは違って見えていたし、また（現在でも）違って見えているということなのだろう（?）。ともかく、ポパーが「態度の問題である」ということを頑ななまでに強調していたことを念頭におくと、1965年当時における両者の（上述した）行き違いの一端は説明できるのではないだろうか。しかし、彼は、問題の他の側面には十分気づいていなかったのではないだろうか。つまり、ポパーは、自身のフィディステックな傾向に対して向けられたバートリーの批判を真正面から受けとめはしなかったのではないか。すくなくとも、筆者は、現時点では、こう考えている。（この間の事情については、恐縮ながら、拙著をご覧になっていただければ幸いです。）

ところで、この話には後日談とでも言うべきものがある。というのは、11月末に、私はクレスゲ氏の友人でバートリー教授の追悼論文集を編集しているというLeslie Graves氏という方からお手紙をいただいて、京都でのことを聞かれたからである。質問の要点は、ごく簡単に言うと、「おまえは、京都でポパーのバートリー評価を変えさせるようなことを何か言ったか」ということであった。この質問に対する私の答えを記す前に、この質問が生じてきた前後の事情に触れておくべきだろう。グレイヴズ氏は、追悼論文集を編集するために、今年の10月にポパーにインタビューしたようで、その時にはポパーはバートリーの汎批判的合理主義に対して根本的に否定的であったという。しかるに、京都の旅から帰ってきた後、ポパーはクレスゲに電話を入れて、はっきり名前を思いだせない人物と意見の交換をし、（帰国してから）The Retreat to Commitmentの第一版を読み直して、それがvery praiseworthyであることを見いだ

したと伝えたという。グレイヴズ氏は明かに戸惑っているようで、汎批判的合理主義に関してポパーの見解に変化が生じたのかどうかを問い合わせてきたわけである。

私自身は、汎批判的合理主義に対するポパーの態度にはアンビヴァレントなところがあるだろうと想像している。ここでは、そう考える理由を記している余裕はないが、Postscript, vol. 1, Introduction, section 2でポパーがすでにバートリーのことを称賛していたことは指摘されるべきであろう。

問題は、ポパーが汎批判的合理主義の何を否定し、何を肯定しているのかという点にある。また、ポパーの見解がどこでどう変わったのかという点が明かにされねばならないであろう。

私は、こうしたことを書いてグレイヴズ氏への返答とした。いずれにせよ、ことはポパーの批判的合理主義の核心にかかわっているので、グレイヴズ氏によるインタビューを早く読みたいものと思っている。

ところで、ワークショップ当日における私の発表の主旨は、合理性の問題よりも「開かれた社会」の理念をどう継承すべきかという点にあった。私は、竹内氏のように、個人主義が連帯を欠いた砂粒のようなアトミズムになってしまって、全体主義のなかに飲み込まれてしまう恐れがあるという趣旨の議論には、正直のところ、賛同しかねる。確かに、そうした危険性もないわけではないだろう。だが、私は、依然として「開かれた社会」の理念は擁護するにあたいするものであり、われわれ自身が、この理念に対して向けられるさまざまな批判に対して、反論をし、そしてこの理念を発展させるべきであると考えている。私は、こうした方向に少しでも寄与したいと思って、当日の発表をしたつもりである。竹内氏とは思索の方向が逆であったのではないかという印象を持っている。この点では、私は明かにポッペリアンであったようである。

ポパー哲学と 「開かれた社会」

濱井 修

1. はじめに

「開かれた社会の思想的基盤」という主題に照してカール・ポパーの思想について若干考えてみたい。言うまでもなく、『開かれた社会とその敵』の著者ポパー自身が自由主義思想家であり、自ら古風な自由主義者をもって任じている。従って、ポパー思想そのものが自由主義思想だと言ってよいので、彼の理論自体が「開かれた社会」としての自由主義社会に対して哲学的基礎を与えるものになっていても別に不思議ではない。

実際、彼の批判的合理主義の哲学、すなわち批判的テストの方法論とその基礎にある人間観や認識論・知識成長の理論は、必要な変更を加えることによって、人間の知識の限界や可謬性、価値観の相違等を前提にして、直面する諸問題について論議を尽しつつ最も正しい解決方法を模索していく「開かれた社会」の基礎理論を提供する。その意味でポパーの理論は、まさしく「開かれた社会の思想的基盤」となる哲学であり、このことをあらためて言い立てる必要はないだろう。

しかしここで私が特に言いたいのは、こうしたポパーの理論内容（可謬主義的認識論や漸次的社会工学など）が「開かれた社会」の哲学的基礎づけになっているだけでなく、逆に彼の批判的合理主義の哲学そのものが自由な理性的討議と真理の探究を可能にする「開かれた社会」の存在を前提にしてはじめて可能になるという、ポパー自身も強調する事実である。つまり、

「開かれた社会」は思想そのものの存立基盤なのである。こうした思想と社会とが互いに支え

あう関係をマックス・ウェーバーの言葉を借りて「選択的親縁関係」と呼ぶこともできるであろう。

そこでこの機会に、「開かれた社会」とポパー思想との選択的親縁関係を示すために、彼の個々の理論ではなく、彼の思想全体と思考方法の特徴が「開かれた社会」の在り方と深く結びついていることを二つの点について確かめておきたい。その第一点は彼の思想の体系的性格であり、第二点は彼の採用する歴史的方法である。

1. ポパー思想の「体系的性」について

先年私は「ポパー哲学の魅力」と題する文章（「ポパーレター」2-1号）の中で、ポパー哲学の魅力の一つに彼の思想の「開放性」があると書いた。そしてポパーの様々な領域にわたる諸見解がある種の体系的性をそなえているとしても、それはあくまでも「未来に向かって開かれた、限りなく成長すべきもの」としての体系であるという旨を述べた。いまでもこの発言内容を訂正する必要はないが、ポパー哲学の魅力は単なる開放性と言うよりも、むしろ「開かれた体系的性」にあると言ったほうがより適切な表現であるように思われる。

ポパーの理論は、彼の科学方法論をはじめ、社会科学方法論を中心とする社会哲学、後期の客観的精神論ないし世界3理論など、一口に言って自然・社会・人間という学問の関心対象すべてにわたる諸理論が、批判主義あるいは可謬主義という根本思想によって貫かれ、体系的な統一性をすらそなえているが、いったい、ポッペリアンと呼ばれる人々を含む多くのポパー思想の共鳴者の中に、彼の思想の体系的統一性に心を惹かれなかったと断言できる人が何人いるだろうか。思うに、ある理論や思想が人の心を惹きつけるに当っては、理論や思想の内容もさる事ながら、それらの美的完成度があずかって

力があるからである。

ただし、今日の一般的風潮は思想の体系的性に必ずしも好意的ではない。むしろ、ヘーゲル哲学に代表される体系的なグランド・セオリーが尊ばれた19世紀の時代風潮とは反対に、全体的思考の断念と並んで体系的性への断念が学究の「知的誠実」の証しであるかのように見なされる20世紀末の今日、ポパー哲学のような体系的思想は、それだけでその合理主義思想と同様に「反時代的」と断じられがちである。

しかしポパー思想の体系的性は、上に述べたように、「開かれた体系」と言うべきもので、その点にヘーゲル哲学のような「閉じられた体系」とは際立った対照を示しており、前者の現代性もそこにある。（もっとも、ヘーゲル哲学をもその「限定的否定」の概念を手掛りにして、「開かれた体系」へと解釈する努力が現代のヘーゲリアナーによってなされているが、そうした試みそのものが「開かれた体系」への現代的要請の証しであると思われる。）

ポパーの体系の「開放性」は「成長性」と言い換えることができる。すなわち、批判的方法論は元来は反証可能性の規準に基づく批判的テストの方法論であったが、それが社会科学に適用されて、「歴史主義」の社会理論と全体的社会工学を批判し、漸次的社会工学の立場を擁護する社会哲学へと「成長」した。そしてさらに批判的方法論そのものも、その不可欠の基礎を「反証」に置く初期の理論から、事実によるテスト可能性の強調をへて、価値の問題については「批判的討議可能性」があればよいと言うまでに「成長」した。進化論的認識論は批判的方法論が知識成長の理論として自らも成長を遂げた結果なのである。進化論的認識論を社会制度を含む人間の文化、「客観的精神」に適用したのが「世界3」理論であり、さらに「世界3」理論を心身問題に適用したのが自我論である。

以上のように、ポパー哲学の体系は不断に自

己改革しながら成長を続ける「開いた体系」であり、それは彼自身の言葉を使えば他ならぬ「開かれた世界」The Open Universeなのである。

2. ポパーの歴史的方法について

ポパー哲学の方法上の特徴に歴史的方法がある。これはいわゆる歴史主義の方法でもなければ、例の「歴史法則主義」の方法でもなおさらない。彼の歴史的方法とは、宇宙・人間・知識など、哲学の根本問題について過去の思想史上の諸先達がいかに考えたか、その研究の成果に立ち帰って、それらを批判的に検討する方法である。それは歴史上の諸思想との理性的・批判的討議と言ってもよい。ポパーは、言語分析こそ哲学固有の方法であるかのように見なす当今の哲学者の間に瀰漫している風潮を批判して、哲学に固有の方法はないと断言しているが、彼自身「時代遅れの方法」と認めている歴史的方法こそ、「科学哲学者」としての彼独特の方法であろう。

過去の諸思想とポパーとの対話の結果は、プラトン、アリストテレス、ヘーゲル、マルクスなど、「歴史法則主義者」に対する手厳しい批判・弾劾が前面に立ち現れており、その強い印象のために彼の思想がどれ程過去の諸先達に負うところが大きいかという側面は、ややもすれば見逃しがちである。しかし私のみるところ、ポパーにとって過去の思想は批判の対象である以上に学ぶべき知恵であった。例えば上記の思想家の場合でも、マルクスの理論についてはその制度主義的方法論を優れた社会科学方法論として受け継いでいるし、プラトンやヘーゲルについては、彼らの客観的理念ないし精神の理論、さらに後者の精神の発展の理論を「世界3」の理論のうちに批判的に継承している。

概してポパーは自身の学んだ思想については

やや寡黙な傾向があるので、以下の指摘は私の個人的な推測の域を出ないものもあるが、「開かれた社会」の思想と密接に関わると思われる何人かの先達を挙げてみたい。

まず、批判的方法論の根幹をなす「批判」の重要性を教えてくれたのがソクラテス以前の古代ギリシャの哲学者であり、彼らによって批判的伝統が確立されたことはポパーの明言するところである。さらに認識論において根本的に重要なのは知識の成長とともに深まる己れの無知への洞察だと言うとき、彼はソクラテスの思想を自覚的に受け継いでいる。

古代ギリシャの思想と並んでポパーが理論面で多くを負っているのは近代啓蒙期に始まる経験主義の思想、すなわちロック、ヒュームらの哲学であるが、「自ら立法者となる自由な人格」の思想を確立したカントの道徳哲学は「自由の哲学」として、ほとんど無条件の賛辞が与えられている。

J. S. ミルの『自由論』は近代の「開かれた社会の哲学」古典であるが、彼の思想がポパーと無関係だったとは考えられない。特に彼の自由論の根幹をなす主張、すなわち、人間の可謬性は理論的にも実践的にも重要であること、人間は議論と経験によって自分の誤りを正すことができること、真理に到達するために自由な論議が開かれているならば、現在可能な限りの真理への接近が果されること、といった主張はそのままポパーの主張と言ってもよい程である。また、彼のいわゆる「否定的功利主義」の理論が功利主義思想を批判的に継承したものであることは言うまでもない。

ポパーがその真理観からしてプラグマティズムに対し冷淡な態度をとるのは当然としても、例えば理論を問題解決の試みとする見方などはデュエイの考えを、また「可謬主義」(Fallibilism) は文字通りパースの思想を、それぞれ受け入れていると見ることもできる。おそらく

ポパーは、時代とともにパースとの理論上の一致を認めるようになったと思われる。この他、過去の思想の中で理論としてポパーが多くを負う理論にダーウィンの進化論があることは言うまでもない。これについては何のコメントも必要としない。

見られるように、ここでは、だいたい19世紀までの思想を「過去」のものとして扱った。アインシュタイン、ラッセル、タルスキー、ハイエク、ウィトゲンシュタイン、カルナップ、クワインなどはすべて「同時代」の哲学者とみて、彼らとの対話ないし対決はあえて取り上げない。

繰り返して言えば、ポパーの歴史的方法は、過去の諸思想・諸理論と批判的に対決・論争し、過去の誤りから学び、自身の包括的な方法論を造り上げていく、自由な精神の研究方法だったのである。

3 ポパーの「開かれた社会」の問題

以上、二つの点についてポパー思想が全体として「開かれた社会の哲学」となっていることを確認して私の報告を了えたいと思うが、最後にもう一言蛇足を付け加えたい。

それはポパー哲学が前提としつつ、自らその思想的基盤たらんとする「開いた社会」そのものの問題である。ポパーも我々も「開かれた社会」を「閉じられた社会」に対するものとして前者の後者に対する優越性にも注目し、前者そのものの問題性についてさらに立ち入った検討は加えてこなかった。そして私の理解するところでは、井上達夫氏らの「共生」についての理論的検討はまさにこの問題に関わっている。

確かにポパーの「開かれた社会」は「閉じられた社会」に対する概念として有効性を持つ。しかし「開かれた社会」が単なる抽象的概念ではなく、一定の現実の世界を想定したものであ

る以上、それは明らかに西洋とりわけ近代西洋の自由主義社会を前提にしたものである。そしてポパー自身はこのことを積極的に認めるはずである。つまりポパー思想と彼の擁護する「開かれた社会」とは西洋近代の自由主義を前提にする点で選択的親縁関係にある。

だが、はたして我々もこの前提を無条件に認められるであろうか。例えば、今日いろいろな文脈で問題となる相対主義の主張も、西洋近代思想を深刻に反省しつつ、これを批判的に継承しようとするものであるとすれば、それをポパーのように一概に「フレームワークの神話」として片付けられるものだろうか。むしろ現代の相対主義と「開かれた社会」とは、選択的親縁関係にあるのではないだろうか。もちろん、こうした問題は、その答をポパーに求めるべきではなく、我々自身が探究すべき課題であろう。

私には、20世紀を貫く相対主義の趨勢が、来るべき世紀における「開かれた社会」の進む方向を示唆しているように思われるのがいかがであらうか。（なお、今世紀の相対主義の動向については下記の稿で述べた。「価値相対主義の帰趨——20世紀の価値論と倫理学」、『哲学雑誌』107巻779号、有斐閣、1992）。



討論を終えて

小河原誠

私の報告に対して、当日、会場で御批判して下さった方、また、個人的に問題点を指摘して下さった方にまずお礼を申し上げたい。以下では受けとめることのできた批判を三点に絞って、現時点における自分の考えをまとめておきたい。

1. 「討論的理性」の概念について

ポパーは伝統的な認識論を科学方法論に転換させたと思う。ポパーにとっての基本的問題は、たとえば、知覚とか認識はわれわれのうちにおいてどのような心的過程をへて生じてくるのかといった事実的な問題ではなく、知識を成長させるためにはわれわれは如何なるルールにしたがって学問的営みをすべきかという規範的な問題であったと思う。そして、ルールの設定(提案)は、明かに共同の営みに対する社会的、あるいはこう言ってよければ、政治的なかわり(介入)を意味するであろう。この意味において、彼の知識論(科学方法論)は、初めから社会哲学であったと言えると思う。

私は、彼の科学方法論がルールの設定にかかわるのであるとすれば、その一群のルールは、自然科学の営みを規制するためのルールとしてのみならず、(もし必要ならば、修正をほどこした上で)討論一般のためのルールとして受けとめることができるであろうと考える。こうしたルールの体系は「合理性」という概念のもとで、把握されるのであろうが、私は、我が国の思想的風土のもとにおいては、真の意味での「討論的精神」といったものが希薄なのではないかと考えるので、あえて「討論的理性」と名付けた次第である。

討論的理性とは、平たく言って、社会的なルール、換言すれば、社会のなかで後天的に育て

られるべき社会的な態度であるから、ここから倫理的規範を引き出すことは容易である。むしろ、討論的理性自体が倫理であると言った方がよいかも知れない。(倫理の問題については、また後で触れる。)

さて、「討論的理性」ということを言いだせば、当然のことながら、「では、そのルール体系を詳しく述べてみよ」という要求の前に立たされることになる。私は、この課題を果たすにあたっては、ポパーの『科学的発見の論理』をルールの体系として解釈することが第一歩であると考えている。具体的には、I. ヨハンソンの先蹤にしたがって、研究をすすめていきたいと考えている。

2. 下からの合理性

この言葉を使うことによって、「非正当化主義的合理性」を必要以上に「政治化」しているのではないかという批判を受けた。換言すれば、もともと知識論の内部で構想された非正当化主義をストレートに政治的文脈に移し変えることに対する懸念が表明されたわけである。

こうした批判に対しては、すでに述べたように、討論的理性が最初から社会哲学的な概念であることを再度強調しておきたいと思う。ここで詳論することは控えるが、私としては、正当化主義的合理性が、いわば天下りの合理性として権威主義と強い親縁性をもつのに対し、下からの合理性としての非正当化主義的合理性は制度の建前の論理に対するプロテストを支えるものであるという点を強調しておきたい。

シンポジウムの終わった後、NIHKの番組(「新・日本人の条件」)を見ていたら、山形県のある小さな町の町長がヒモつきの補助金(実に、一つの建物に二つの玄関を設置しなければならないとか、一つの店からものを持っても提出先毎に領収書を書いてもらわねばならない、等々)の是正を求めて陳情している姿を伝えていたが、町長の行動は下からの合理性を体

現するものであると思わざるをえなかった。官僚たちは、補助金が国会の承認を受けたものであり、それを遂行することは正当であり、合理的であると考えているのであろう。彼らにとっては、国の政策が現場でテストされ、苦情を上申されてくることは煩わしく厄介なことではなかろう。しかし、こうした場面で如何なる行動が合理的なのかということ考えた場合、この町長の行動に見られるように、欠陥をはっきりと指摘し、その除去を求める行為のみが合理的であると思わざるをえないであろう。正当化主義的合理性のみが合理的であるとされていたら、町長の行為は非合理的な反逆行為となってしまうことであろう。

下からの合理性の概念は、政策が遂行されるあらゆる局面で草の根民主主義を支援する合理性の概念になると私は考える。下からの合理性は、行為の合理性を評価する概念であるから、これを担う集団とか政党といったものを想定する必要はないであろう。合理性の概念はどのような行為にも、また行為の主体に対しても適用される概念である。

3. 倫理の問題

私は、すでに述べたように、討論的理性（の概念）から倫理を引き出すことに問題はないと考える。実際、ポパーも『よりよき世界を求めて』の題14章では「新しい職業倫理」を知識論的考察から引き出している — もっとも、大胆におこなっているとはいえないと思うが。私は、可能なかぎり大胆に討論的理性から倫理を引き出すべきであると考えている。

たとえば、限りなき無知を前にしてのわれわれの平等、世界2に対するパーソナルな批判ではなく世界3における客観的で非個人的な批判、可謬主義に由来する寛容、議論における負（マケ）を生きるということ、友好的にして敵対的な批判というときの最適な批判のあり方、立場ではなく問題の共有。

こうした倫理の体系が全体としてどう名付けられるのかということをおたくしは知らないが、これが「知識論的偏向」をもっていることは、いままでの議論からしても明かであろう。しかし、この「偏向」は糾弾されねばならないものなのだろうか。確かに、糾弾はされないにしても、批判を受けることは間違いないだろう。私は、桂木氏の交換を原理とした「市場倫理」という考えを聞いて、知識論的偏向をもった倫理と市場倫理とはどうかかわってくるのだろうかと思わざるをえなかった。ただ、私としては、知による人間の開放というソクラテス的理念にこだわった場合、真理が「交換の原理」によって歪められることのないように願わざるをえない。しかし、いずれにせよ、知識論的偏向をもった倫理をきちんと組み立ててみることをしなければ、他の倫理体系と討論することもできないと考える。

'PRAGMATIC INCONSISTENCY'

(隙間を埋めるための独り言)

「可愛いお子さんね」と言いながら、こっそり髪の毛を引っ張る。

「食べられた食事じゃないね」と言いながら、おかわりを何杯もする。

「長生きしたくはありません」と言いながら、健康診断は必ず受診する。

「政治改革」を主張しながら、子供の就職を世話してくれた候補に投票する。

「怒ってなんかいらないよ」と言いながら、頬が引きつっている。

「開かれた社会」を推奨しながら、自分の意見が通らないのは大嫌い。

世界3の独立性を主張しながら、自分の造語した言葉の使用法につき、特権を要求する。

ポパーの注視点

—方法論的本質主義批判と方法論的個人主義

杉田 秀一 (無所属・法哲学)

◇1 はじめに

反証理論が、物理学だけでなく「応用」科学および社会科学を含む科学一般を通じたポパーの科学方法論の中核であることはまちがいない。しかしさらに二つの方法論的主張が、反証理論と緊張しつつも同時にそれを補完して、きわめて生産的なポパーの方法論の骨格を形作っている。ひとつは方法論的本質主義 (ME) に対するところの方法論的唯名論 (MN)、もうひとつは社会科学における方法論的集団主義 (MC) に対するところの方法論的個人主義 (MI) である。本稿ではこの二者について検討し、その角度からポパーの意識主義・言明主義 (cf. 嶋津格「客観と主観、発見の論理と心理」『自由と規範』1985年所収) に接近してみたい。(なお以下 ME 等の略記号を使用する。)

◇2 方法論的本質主義 (ME) 批判

「…とは何か？」と問うてはならない、言葉とその意味について論議してはならない——この MN の指示する論点 (ME 問題) についてポパーはこう述べている。「今なお私を現代のほとんどの哲学者から分かつしめている争点であり、哲学者としての後の生涯にとってきわめて重大なものであることがわかった」と (森博訳 “Autobiography” 6 節 初出 1974)。MN の重要性は、少なくともポパー体系の理解にとって、反証理論にまさるとも劣らないはずである。しかし (まさにその言葉が半ば自己予想しているのだが) 今日でもポパー体系の賛同者を含めほとんどの者は彼の言葉を真面目に受けとめていない。MN はせいぜいポパーの偏狭な言語「嫌い」の表現あるいはとりたてて議論するまでもないトゥ

ルーイズムとしてしか理解されていないのである。もっともその原因の一端はポパー本人にある。明確な問題定式化を指図する当の ME 問題に関するポパーの議論は、「私が明確にするのに生涯をかけた問題点」(同 7 節) という言葉が暗に認めているように、一見するほど明快とは言えないからである。

まず次のことを確認しておこう。第一に ME と「形而上学的」本質主義とは区別される。実際ポパーは、かなり早い時期 (自伝によると、“The Poverty of Historicism” 執筆に先立つ遅くとも 1925 年頃) から両者を区別していた。それゆえポパーの言う ME 批判の要点は、それが本質と現象の二重世界化により、理論を批判から免疫化しようということにあるのではない (これは碧海教授の本質主義批判とポパーの ME 批判との相違でもある)。第二に「究極的説明」の観念あるいは正当化主義は、ME とは独立に批判できる以上、ME 批判固有の標的は、前者とは別のところにあるはずである。

ではいったい ME のどこが批判されるべきなのか。ME の説明の変遷はポパーの苦心を物語る。(i) “The Poverty of Historicism” (初出 1944-5) では、ME における理論的モデルと具体的事物との混同が、(ii) “The Open Society and its Enemies” (初出 1945) では、ME における真の本質主義的定義同定の困難および定義の無限背進性が ME 批判の理由として挙げられている。しかしこれらは形而上学的本質主義と結び付いた ME の原因または派生的な帰結に対する間接的批判である。ME そのものの問題の所在は、(iii) “On the Sources of Knowledge and of Ignorance” (初出 1960) における意味と真理の対照表による説明を経て、ようやく (iv) “Autobiography” (1974) において、核心に近づいたかに見える。そこでは ME が理論の意味を言葉の意味の関数と見る見方に依拠していることが ME 批判の根拠とされる。だがそのような見方がなぜ批判されるべきなのか、さらに積極的に MN を支持する理由はどこにあるのか、彼はなお十分な議論を提出しているとは言いがたい。私見によれば、それは彼が ME 問題の核心が属するある領域に立ち入ることを

躊躇しているからである。その領域とは非意識的知識すなわち暗黙知の領域にほかならない。ここにおいて明示的な言明間の論理的形式的側面に集中するポパーの姿勢（意識主義ないし言明主義）はもっとも顕著であるように思われる。

ポパーの言明主義的枠組みの拘束から逃れ自由にME問題を素描してみよう。その要点はまさに言語的知識の成長に不可欠な非意識的知識すなわち暗黙知の意義の認識にある。我々がある適切な方向の問題として注視できたとき、非意識的過程は理論全体を真理へ向けて動かし、その反射としていわば従属的に語の意味が変化する。知識の成長はそのような非意識的過程を不可欠とするのだが、そのとき向けてはならない注視の方向を禁じているのがMNである。我々が理論を通し事実注視してこそその理論を構成する語が本来の意味を持つことからわかるように、語への注視は当該理論の非意識的過程における活性化をむしろ阻害するからである。このようにMNは、発見の「心理」における指針、非意識的過程を創造的発見的方向へと導く指針なのである

（ポパーは「問題定式化」の指針という表現を好むだろうが、それはむしろ事態を曖昧にする）。他方MEの背後にあるのは、非意識的知識に関する根本的無理解と知識の明示化に対する過剰な信頼である。それゆえに結局MEは、本質定義というきわめて不毛な方向へと非意識的過程を導かざるをえない。

そうだとするとこう言えるだろう。ME問題に関するかぎり、ポパーは、あと一步踏み出すことで、M. ポラニー（そしてハイエクのポラニー的側面）と接触する地点に到達しているが、彼が自らに課した言明主義的制約ゆえにその一步を踏み出していない、と。ME問題の明確化に関するポパーの苦境は、言明主義の枠内に踏みとどまりながらも非意識的領域の指針を示しさらに説明しようとする点に起因するように思われる。

◇3 方法論的個人主義（MI）

以上のようなポパーの言明主義の姿勢は、彼の

MI論ひいてはそれを基礎とするポパーの社会哲学上の主張にも影響を与えている。ドイツ社会科学方法論争におけるカール・メンガーの合成的方法の主張に始まりハイエクにより継承・洗練されたMIの眼目は、単なる方法としてのMIの主張よりもむしろ、その基底にある社会現象の複雑性と認識主体の情報処理能力の制約性という認識論的問題の提起にある。このMI問題こそハイエクの社会哲学の核心であり、その反面としての非意識的ルールの意味の認識などの事柄を伴う論点であるとともに、ポパーの反証理論に対するハイエクの批判ないし「限定解釈」（嶋津）の中心論点であった。

このようなポパー体系の内に緊張を持ち込むはずのMIをポパーはどう扱っているのか。確かにポパーはハイエクを引用しており、ハイエクのMI論を継承しているかに見える。だが実際にはポパーは、MIをもっぱら上述の反ME=MN論の（i）、すなわち普遍名辞の指示するモデルと現実との区別という言明主義的見地からのみ説明しており、社会現象の特殊な複雑性という実体面に十分踏み込んでいない（“The Poverty of Historicism”）。彼は他方でゼロメソッドや状況論理などでMIを補足してはいるが、この点は変わらない（“The Open Society and its Enemies”）。つまりMI問題の認識という点でポパーは不徹底なのである。その結果彼のMIの制約は歴史法則主義を生み出す概念実在論的なMCを排除するのみで、当時の経済学の主流を追認する緩やかなものとなり、ポパーの社会哲学上の帰結はハイエクのそれから離れていくことになる。このポパーの路線上にいるH. アルバートに至ると、もはやMIは反証可能性の問題に解消されてしまったかのようにあり、もっぱら反証可能性の見地から経済学の抽象性を社会学により克服することが提唱される（‘Modell-Platonismus: Der Neoklassische Stile des oekonomischen Denkens in Kritischer Beleuchtung’ in Logik der Sozialwissenschaften, E. Topitsch hrs. 1965）。さらにまた1950年代を頂点に英語圏で起こったMI「論争」が結局実りのないままに終わったのも、方法論的議論を存在論また

は意味論の議論と混同する批判者側の無理解もさることながら、MI擁護にあたった者たち（ワトキンス、アガシラ）が実質的に以上のようなポパーのMIに依拠していたという事情が小さくない。

もちろんここでの要点は、社会現象が実際ハイエクのMIを支持するほど複雑なものかどうかではなく、ポパーがこのMIの妥当根拠となる論点を明確に捉えていない（あるいは表現していない）点、そしてこのようなポパーのMIの取扱へと導いたのは言明主義的枠組みである点にある。

◇4 ポパーにおける光と影

MNとMIに並行性があるのは明らかであろう。MN・MIいずれも、仮説形成過程つまり発見の「心理」に関わる（構成的というよりむしろ戦略的な）指針であり、仮説形成については「何でも構わない」という反証理論に限定を加えるものである。さらにMN・MI双方をめぐるポパーの言明を規定しているのは、明示的な言明間の論理的形式的側面に集中する意識主義的・言明主義的姿勢である。このような姿勢を修正するはずの進化論的認識論の提唱後も、MN・MIに関するかぎり、基本的にそれは変わっていないように思われる。

しかしなぜポパーは頑なまでにこのような姿勢にこだわるのか。その姿勢を支えるのは次のようなメタ方法論的戦略ではないだろうか。

科学的実践を遂行する水準で注視すべきでないことは方法論を語る水準でも注視すべきでない。

ポパーは非意識的過程を導く指針全体くについて語らずに——その明示すべき部分だけを明示することにより——それを<示す>のである。反証理論や世界三論もこの純粹に知的な暗黙的实践を志向した戦略に方向づけられていると見るのが可能なように思われる。この戦略の下では、「それらが非意識的過程について十分語っていない」という異議は的外れ・不適切でしかない。このような観点から見れば、ポパーの意識主義は徹底した非意識主義の裏返

しも言えるだろう。ひたすら光明へ向うかに見えるポパーの言明を規定しているのは影の部分の考慮なのだ。もちろん、そのような戦略がどこまで成功しているかあるいはそもそも妥当かどうか、が次に問われるべき問題である。

(※本稿の内容は修士論文(1987年)と一部重なる。)

'Popper's Focus : Methodological Nominalism and Methodological Individualism'

by Shuichi Sugita

(ex-JSPS Fellow for Japanese Junior

Scientists, at the University of Tokyo

Graduate School Division of Law & Politics)

[Summary]

I begin by stressing the importance of Popper's criticism of methodological essentialism. However, its true problem is concerned with the 'psychology' of discovery, namely the tacit dimension, although Popper himself seems to have tried to avoid stating it directly. This expresses his characteristic attitude to focus on the logical relations of articulate statements. Then, by reference to this attitude, I explain why his methodological individualism is not thorough, compared with Hayek's. Finally I point out that there lies his meta-methodological strategy not to 'state' the whole process guiding the tacit but to 'show' it by stating explicitly only what ought to be stated as a focus. And I suggest that all his methodological discussions are led by this strategy which is originated to purely scientific tacit practice. That is why he rejects 'psychological' criticisms as irrelevant.

「訳者あとがき」にも書いておいたように、拙訳は原著『科学と懐疑論』(Science and Scepticism, Princeton U.P., 1984)の全訳ではなく、原著者が改訂を含めて作成した縮刷版の日本語訳である。教授によれば、縮刷版のできる以前に碧海先生に全訳を依頼したが、先生は‘formidable’ということで丁重にお断わりになったとのことである。私も全訳であれば辞退したことだろう。しかし、ワトキンス教授に翻訳を約束してから七年もたってしまい、とくにこの数年間は言い訳の種も尽き、年末のクリスマス・カードの時期が来るたびに憂鬱であった。当初は通常通りの縦組の予定であったが、数式の多さから途中で横組に変更になったことも災いした。しかし、その間筆者がアカデミック・ヴィジターとしてLSEに滞在することができ、教授と疑問点についてじっくりと話し合えたことは幸いであった。(実を言えば、完成した訳書をもってLSEに行くつもりだったのであるが。)

さて、本書でワトキンスは、「新ポパー派」の立場から、科学の合理性を懐疑論の攻撃から擁護しようとしている。競合する科学理論の間でいずれか一つを選ぶ合理的な理由はけっしてないというテーゼを、ワトキンスは「合理性懐疑論」(rationality-scepticism)と呼ぶ。合理性懐疑論が正しければ科学は合理的ではない。しかし、蓋然性ないし確率を理論選択の規準とする蓋然主義(probabilism)を彼は拒否する。むしろ彼は、証拠が科学理論の蓋然性ないし確率を引き上げることはありえないという「蓋然性懐疑論」(probability-scepticism)を支持しつつ、科学の合理性を擁護しようとする。

合理性懐疑論を打破し、競合する理論の間で合理的な選択をなすためには、科学の目標についての明確な定式化が必要である。もしポパーが言うようにそうした目標の選択が「決断の問題」であるならば、合理性懐疑論を打破することはできないであろう。というのも、その場合には、どの仮説を選ぶ

ことが合理的であるかは、各々の科学者の選ぶ目標に応じて異なることになるからである。ワトキンスは、科学に最適目標(the optimum aim)があると主張する。彼はまず五つの適合要件を定める。

1. 整合的(coherent)であること。
2. 実現可能(feasible)であること。
3. 対抗理論の間での選択において指針として役立つこと。
4. 不偏(impartial)であること。
5. 真理という考えを含んでいること。

これらの要件を満たす目標は許容可能(permissible)な目標であると言われる。ここで二つの可能性が出てくる。一つは、そうした許容可能な目標を何か一つ採用すれば別のそうした目標に含まれている願望は捨てられなくてはならない場合である。この場合は、どの目標も他の目標にまさるものではなく、最適目標は存在しないことになる。もう一つは、そうした目標のうちの一つが他の一切の目標にまさっている場合であり、それこそ最適目標であると言えるものが存在する場合である。もちろん、提案された目標が最適目標であるという証明はない。それにまさる目標が存在することは論理的に可能だからである。

そこでワトキンスは、科学の目標が満たすべき五つの要件を満たしかつ最も包括的で意欲的な目標、つまりもっともユートピア的な目標を科学の最適目標として取り出す。それは「ベーコン・デカルト的理想」(Bacon-Descartes Ideal)と呼ばれる。それによれば、科学はすべての現象に対して統一的で究極的な、そして確実に真なる説明を与え、未来のすべての現象を完全に予測可能なものとすべきである。しかし、確実に真であるという要求は削減されなくてはならない、と彼は論じる。科学の理論は確実にではなくて可能的に真である、つまり科学者はその最善の努力にもかかわらずその理論が偽であると示すことができなかったという意味で真であるべきなのである。しかしベーコン・デカルト的理想の

他の成分については、厳しい削減をする必要はない。それらはむしろ進歩的な性格を与えられることによって生かされる。たとえば、科学は実際に究極的な説明に到達すべきであると要求するかわりに、科学はいつそう深い説明を求めるべきであると要求することになる。統一性や予測能力についても同様である。

こうして、徹底的にユートピア的な科学の目標に対する批判的な吟味から、科学理論は可能的に真であり、より深く、より統一的で、より多くの予測能力をもつべきである、という最適目標が取り出される。すでに述べたように、或る理論が可能的に真であるとは、科学者が最善の努力にもかかわらずその理論が偽であると示すことに成功していないということであり、それが確実に真であるとか蓋然的であるとかいうことではない。それゆえ、可能的に真なる理論のうちで最も深く最も統一的で最も多くの予測能力をもつ理論をわれわれは選択すべきである、とワトキンスは論じる。

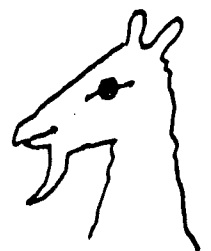
以上が『科学と懐疑論』におけるワトキンスの主要な論点である。本書が出版されてから五年後に教授の記念論文集(Fred D'Agastino and I.C. Jarvie eds.: Freedom and Rationality: Essays in Honor of John Watkins, Kluwer Academic Publishers, 1989) が出版された。寄稿された論文のなかには、一般的な話題もあるが、とくに本書を批判した論文がいくつかある。A・マズグレイヴ、編者の一人であるF・ダイガスティーン、LSEの同僚であったJ・ウォラル、E・ザハール等の論文がそうである。ワトキンスはこれらの批判に対して「科学の合理性と帰納の問題：批判に対する応答」(“Scientific Rationality and the Problem of Induction: Responses to Criticisms”, British Journal for the Philosophy of Science, 42, pp. 343-368, 1991.) で答えている。主な論争点は、(1) 科学の最適目標、(2) 経験的基礎の問題、(3) 帰納の実践的問題等についてである。詳しく紹介できないが、(1) についてダイガスティーンは、不偏性の要件と実現可能性の要件とは折り合わないという批判をしている。ワトキンスは、実現可能であると

は、実現されえないとは知られえないことだとして、批判をかわしている。またマズグレイヴは、ワトキンスが「真理」ではなく「可能的真理」へと目標を切り下げたことに強く反対している。(2) についてザハールが、また(3) についてはウォラルが批判を展開しているが、ワトキンスはウォラルの批判を受け入れ、自説をかなり修正している。因に(2) については、拙論「批判的合理主義と経験的基礎の問題」(大阪市立大学文学部紀要『人文研究』印刷中) で詳しく紹介しておいた。

教授の研究室には数冊の日本語の本が置かれていた。多分寄贈されたものであろう。或る日彼のいないときに研究室の書棚を眺めていて奇妙なことに気が付いた。日本語の本はすべて天と地が逆さまになっていたのである。私は余計なお世話であったが、生来の気性からちゃんと並べ換えた。次の日に研究室へ行って見ると、それはことごとく元通り天地がひっくりかえていた。私は自分の訳書も今ごろひっくりかえて彼の家書棚にあるのではないかと想像している。もっとも縦組のせいならば、拙訳は天地がひっくりかえることはない。今度行ったときにそれを厳しくテストするのが筆者のひそかな希望である。

教授はその後LSEを退官し、足の手術を受けたりもしたが、今は元気で研究に打ち込んでいる。今年の六月に教授に訳書を送ったら、しばらくして返事が来た。北京でのコンフェレンスからたったいま戻ったところだと書いてあり、謝辞のあとで訳書の「ダストジャレットは本当にきれいだ(例の醜い男の写真は別だが)」と書いてあった。ついでに、売れることは期待していないとも。

(1992. 9. 24)



記者による新著紹介

橋本努（東京大学大学院）

昨年出版された、Debra A. Redman, “Economics and the Philosophy of Science”, Oxford University Press, 1991. は、浦上博達監訳／橋本努訳というかたちで、早ければ今年の一二月にも、文化書房博文社から邦訳が出版される予定である。すでに同出版社からは、「現代経済哲学シリーズ」の第一弾としてジョン・フィービー著『経済学方法論の新展開』が刊行されているが、今回訳出するデボラ・A・レドマンの『経済学と科学哲学』は、このシリーズの第二弾にあたる。また今後の予定としては、馬渡尚憲監訳のもとに、マーク・ブローグの『経済学方法論』もこのシリーズに加わるそうである。

本書は、さまざまな意味でユニークかつ斬新である。テーマとしては、「ウィーン学団にはじまる科学哲学の精確な批判的概説を与えつつ、科学哲学と現代の経済学者たちの関係を跡づける」ことにあるが、それは例えばブローグやハチソンといった、現在の権威ある経済学方法論者には批判的なスタンスをとって書かれている点に、特徴がある。レドマンが異議を唱えるのは、経済学方法論の領域における悪しき慣習、すなわち、科学哲学者の権威をかりて、最も著名で独創的な経済学者の仕事を酷評するという「知性における父親殺し」であり、もう一つは、科学哲学の知見によって特定の経済学領域を正当化しようとする「知性における権威崇拜」である。彼女によれば、どちらの議論も挫折せざるをえない。というのも、科学哲学は、経済学における絶対的な権威の源泉ではないからである。実際、本書の前半は、最近の科学哲学における議論を踏まえて、クーン、ポパー、ラカトシュ、ファイヤアーベントといった権威的人物を批判することに捧げられており、後半では、今度は経済学に適用された科学哲学の権威、ないしその影響力が批判にさらされることになる。

科学哲学と経済学の生産的な関係は、これまで論じられてきたような、権威／従属関係の中にはないだろう。経済学者が科学哲学から学ぶべきことは、科学者社会のルールや科学の認識論的正当性といったものではなく、むしろ、科学者個人個人の規範的行動原則、すなわち、寛容、誠実さ、私心のなさ、批判的態度、といった事柄である。レドマンはこのように、議論の土俵を「経済学の正当性」の問題から、「経済学者の倫理・規範」の問題へと移行させつつ、この倫理規範の観点から、経済学の現状を徹底的に批判してみせる。そうした意味で本書は、これまでの方法論議とはまったく異色の、きわめて眩目に値する書物であると言えよう。

構成にも特徴がある。もとより本書は、経済学に携わる読者を対象に、科学哲学と経済学の現状について解説した入門書であるのだが、同時に、方法論研究のためのマニュアルとしての価値がある。というのも、論述全体の三割以上が注釈および付録に当てられていて、そこには研究すべき文献が細かく提示されているからである。また本文および注釈の論述は、実にさまざまな書物からの引用でつつられており、読者はそれぞれの書物に興味を喚起されるだろう。巻末の参考文献一覧には、原書ではpp. 186-234. にわたって、およそ一千本の文献が掲載されている。読者にとって、これは非常に便利なガイドマップとなるにちがいない。（これは邦訳書でもすべて載せる予定である。）ちなみに、これでも物足りない研究者には、レドマンは、手引書『経済学方法論：科学哲学に関連する参考文献一覧(1860-1988)』（1989）まで用意している。彼女はまさに、一流の文献マニアでもあるのだ。

本書の内容を簡単に紹介してみよう。本書は二部構成からなり、第一部は科学哲学、第二部は経済学と科学哲学についてまとめられている。第一部では、まず論理実証主義の衰退について概説が与えられると、次に、その対極にある科学の社会学的説明の流れ、すなわちM. ポラニ

一、L.フレック、T.クーンについて論じられる。レドマンは、とりわけクーンについて批判的に吟味すると、その後ポパー以降の批判的合理主義をもって来る。彼女の意図としては、ポパーが実証主義者ではないことを明確にし、またポパー、ラカトシュ、ファイヤアーベント、パートリーの四人に共通した、科学者に対する規範的スローガンを評価したいのであろう。これらは第二部の議論の中で生かされることになる。そして第一部の最後は、歴史と科学哲学の関係、とりわけ、S.トゥールミンおよびN. R. ハンソンについて論じられている。また彼女は、科学哲学者たちのさまざまな私事を織りまぜて、本書に読み物としてのおもしろさを与えることも忘れていない。

第二部では、まず「実証的」という言葉の多義性を中心に、経済学と科学哲学の初期の関係が整理される。次に、ポパー、ラカトシュ、クーンの科学哲学が経済学に適用される場合の諸難点について、これまでの経済学者が彼らに無批判に賛美してきたという事態を正しつつ、検討がなされている。そこでは例えば、経済学において反証は成立しないこと、パラダイムおよび研究プログラムという概念はあいまいであり、経済学に適用すると乱用されてしまうこと、通常／革命という用語は経済学を記述するには適切でないこと、などが主張される。

第二部の後半では、レドマン特有の議論が展開される。内容は、アメリカにおける経済学の制度的側面について歴史的かつ批判的に検討するものであるが、これはクーン流の知識社会学の手法を、ポパー流の規範的観点から再編して応用したものと言えるだろう。そこでは、アメリカ経済学界の閉鎖性、とりわけそこにおける女性差別の問題、あるいは、研究の利害依存性、経済学者を養成する制度の徒弟性、といった問題が指摘されている。レドマンはこのように経済学の現状を批判すると、経済学の将来に対しては、結局、研究者各人が倫理規範を再生すべきなのだ、と訴える。

それゆえ本書の結論はこうである。科学における知識の成長は、最終的には科学者各人の倫理的問題であり、それは科学的合理主義の態度、すなわち、「科学にとって最も望ましい環境を保障するために各人が学ぶべき態度」を要請する。そしてこの態度を実際に身につけ、将来における誤りを避けるためには、各人は科学の外的歴史から — ここでは経済学の制度的欠陥の歴史から — 大いに学ばなければならない。したがって経済学と科学哲学の生産的な関係もまた、科学史（経済学の外的歴史）と科学哲学の規範的インプリケーションの結合から、与えられることになろう。

私は本書のこのような視点が、今後の研究方向を探るための橋頭堡となることを期待したい。

閉じた社会

(隙間を埋めるためのもう一つの無駄口)

「開かれた社会」を深く理解するには、それが何でないかを知らねばならない。

この「知る」は、単なる頭と言葉だけの知識では多分不十分で、もっと身に染みて深く感得されねばならない。

『開かれた社会とその敵』でポパーが設定した敵は、プラトン・ヘーゲル・マルクスだったが、それらは思想のレベルに留まっている敵達だから、それだけでは「閉じた社会」はまだ、現実とはなっていない。

これを書いた時のポパーには、当然ナチス・ドイツがその現実態として頭にあっただろう。その後、あるいはそれ以上に相応しい、閉じた社会の現実例として、ソ連の虚偽に満ちた歴史が、今回の崩壊によって、具体的な情報とともに白日の下に晒されようとしている。

—— 友人がくれた写真集、時事通信社『赤い帝国』(1992年12月)の中の、歴史的写真を見ながら。 ——

I. 研究書

- 遠藤 克彦 『社会科学の哲学——ポパーとフランクフルト学派の『あいだ』』世界書院、1991
 小河原 誠 『討論的理性批判の冒険——ポパー哲学の新展開』未来社、1993
 川村 仁也 『ポパー』清水書院、1990
 コーフォース、M. 『開かれた哲学と開かれた社会——カール・ポパー批判』城塚登/他訳、紀伊国屋書店、1972
 関 雅美 『ポパーの科学論と社会論』勁草書房、1990
 高島 弘文 『カール・ポパーの哲学』東京大学出版会、1974
 マギ、B. 『カール・ポパー——開かれた社会の哲学』森博監訳、富士社会教育センター、1980
 ルカ、ドミニク 『ポパーとウィトゲンシュタイン——ウィーン学団・論理実証主義再考』野崎次郎訳、国文社、1992

II. 論文・その他

- 青木 英実 「多元的競争社会における知識の進化と人間の教育——K. ポパーの思想を手がかりとして」『九州大学教育学部紀要 教育学部門』No.28,1982
 碧海 純一 『合理主義の復権』木鐸社、1981
 — 『法哲学論集』木鐸社、1973, 再増補版 1981
 — 「社会科学に於ける認識の客観性についての一試論」『法学協会雑誌』Vol.81 No.1, Vol.82, No.1,4, Vol.83 No.1,1964-9,1966-1,1966-3,1966-5
 — 「サー・カール・ポパーの近況」『学会会報』No.731,1976-II
 — 「ヨーロッパ大陸における批判的合理主義」『社会科学の方法』Vol.5 No.8,1972-8
 — 「カール・ポパーと日本の学会」『UP』No.19,1974-5
 — 「ラッセル・ポパー・民主主義 1~6」『kakushin』No.210,1988-2, No.211,1988-3, No.212, 1988-4, No.213,1988-5, No.218,1988-10, No.219,1988-11
 — 「ラッセル・ポパー・民主主義 完結編 上・下」『kakushin』No.215,1989-5, No.216,1989-6
 碧海 純一編 『法学における理論と実践』学陽書房、1975
 秋間 実 「カール・ポパーとマルクス主義——『歴史法則』を中心に」『季刊科学と思想』No.2,1971-10
 浅田 彰 「公理主義的経済学の誕生 ウィーンからケンブリッジ(上)」『人文学報』(京都大)No.55,1983-9
 鎌坂 真 「ポパーと弁証法の問題」『関西大学文学論集』Vol.23 No.4,1974-3
 — 「K. ポパーと弁証法の問題」『関西大学哲学』No.5,1974-5
 — 「K. ポパーと弁証法の問題」『季刊科学と思想』No.38,1980-10
 — 「理性と自由——カール・ポパーの自由論批判」『季刊科学と思想』No.23,1977-1
 アバル、R. 他 『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』城塚登/浜井修訳、河出書房新社、1979
 アバル、K.O. 「科学時代における責任倫理の合理的基礎付け」『思想』No.739,1986-1
 アバル、H. 「K. R. ポパーの批判的合理主義」『国家学会雑誌』Vol.76 No.3/4, 1963
 — 『批判的合理主義の擁護』浜井修訳、『批判的合理主義』碧海純一編、ダイヤモンド社、1974
 — 『批判的理性論考』萩原能久訳、御茶の水書房、1985
 石上 豊 「批判における基準と根拠——ポパー、ハーバマスを手掛りとして」『Sociologica』Vol.12,1988-3
 市井 三郎 『哲学的分析』岩波書店、1963
 — 「歴史法則と論理——K. R. ポパー『歴史主義の貧困』」『思想の科学』No.6,1959-6
 — 「ポパー『言語と身心問題』」『理想』No.266,1955-7
 入江 重吉 「進化的認識論の背景とその認識構成説」『熊本短大論集』Vol.36 No.2,1985-12
 植木 哲也 「反証主義の方法論と科学の進歩」『哲学』(北海道大学哲学学会)No.18,1981
 — 「ニュートン理論は反証可能か——境界設定問題と方法論」『哲学の探究』(全国若手哲学研究者ゼミナール編)No.9,1981
 — 「『共通の言語』という考え方について——D. デイヴィッドソンの意味理論を手がかりに」『哲学』(

- 北海道大学哲学会) No.23,1987
- 「科学の‘進歩’と‘合理性’——ポパーとラカトシュの場合」『科学基礎論研究』Vol.16 No.4,1984
- 上原 行雄 「非決定論と自由の構図素描」『自由と規範——法哲学の批判的展開』東京大学出版会、1985
- 内田 忠夫/浜井 修 「漸進の思想」『別冊経済評論』No.7,1971-11
- 内田 韶夫 「ポパーの可謬主義」『福島大学教養学部論集(社会科学)』No.33,1981-12
- 「ポパーの知識論」『福島大学教養学部論集(社会科学)』Vol.30 No.2,1978-11
- 梅林 誠爾 「知識の進歩と心理」『知識とはなんだろう』鈴木茂/他著、青木書店、1984
- 「科学とアナロジー」『熊本女子大学紀要』Vol.38,1986-3
- 浦本 勳 「ポパーにおける『科学の方法』」『科学基礎論研究』Vol.15 No.2,1981
- エッカル、ジョン・C. 『脳と実在』 鈴木二郎/宇野昌人訳、紀伊国屋書店、1981
- 『脳——その構造と働き』 大村裕/小野武年訳、共立出版、1977、第2版、1979
- 遠藤 克彦 「ポパーとアドルノの間——社会科学の論理をめぐって」『愛媛大学教養部紀要』No.10,1977
- 「認識および実践における批判のあり方問題——ポパーをめぐるハバースとアルバートの間 3」『愛媛大学教養部紀要』No.15-2,1982
- 「ポパーの確率論と量子論解釈について」『愛媛大学教養部紀要』No.22-1,1989
- 大川 修司 「ポパーの論理と方法論」『科学基礎論研究』Vol.17 No.1,1984
- 大林 信治 「批判の方法としての社会科学——ポパーの批判的合理主義をめぐって」『商大論集』(神戸商科大) Vol.26 No.5/6,1975-3
- 岡部 悟朗 「現代イギリス政治理論研究——カール・R・ポッパーについて」『政治研究』No.21,1973-6
- 小河原 誠 「方法論的観点から見たポパーの社会哲学」『思索』No.6,1973-10
- 「ポパーとヒューム——ポパーの哲学的自己理解について」『倫理学年報』No.29,1980
- 「ほらふき思爵のトリレンマと合理主義の問題」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』No.19,1983
- 「ポパー・バートレイ論争——批判的合理主義の変貌」『社会思想史研究』No.8,1984
- 「汎批判的合理主義の成立——批判的合理主義の変貌」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』No.20,1984-11
- 「最終的基礎づけか永続的批判か」『科学哲学』No.17,1984
- 「『実証主義論争』研究ノート(1)(2)」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』No.24,261986-10,1987-10
- 「イデオロギーと批判」『知の理論の現在』丸山高司/小川侃/野家啓一編、世界思想社、1987
- 「学問の基礎」『東北哲学会年報』No.3,1987
- 「ワトキンスのCCR論駁をめぐって——CCR論争史概観(1)」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』No.28,1988-11
- 「ポストのCCR論駁をめぐって——CCR論争史概観(2)」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』No.30,1989-11
- 「開かれた社会を求めて(K. R. ポパー)」『命題コレクション哲学』坂部恵/加藤尚武編、筑摩書房、1990
- 「(海外哲学展望)ポパーの周辺から、そしてちょっぴり進化論的認識論のゆくえについて」『理想』No.645,1990-1
- 生越 利昭 「『パラダイム』と科学観の転換——クーンとK.R.ポパーの対立面をめぐって」『商大論集』(神商大) Vol.30 No.1,1978
- 藤山 泰之 「科学哲学における方法論的変革」『科学史・科学哲学』(東大科学史・科学哲学研究室)No.5,1985-9
- 「Vicissitudes of Causality:A study of meta-scientific argument」『科学史・科学哲学』(東大科学史・科学哲学)No.7,1987-9
- ガレット、ニコラ・バロ 「パース・ホームズ・ポパー」『三人の記号——デュバン、ホームズ・パース』エーコ、U./シービオク、T.A.編、小池滋監訳、東京図書、1990
- 神野 慧一郎 「批判的合理主義の側面」『哲学研究』Vol.43 No.7,1966-11
- 神山 四郎 「『歴史主義』の意味混乱」『史学』Vol.33 No.3/4,1961-4
- 川村 仁也 「ポパーにおける『自然と社会』」『横浜国立大学人文紀要第1類哲学社会科学』No.27,1981-11

- 北村健之助 「経営経済学とK. R. ポパーの方法」『駒大経営研究』Vol.16 No.1,1984-7
- クインラン「カール・ポパー——制度としての知識」『現代思想』Vol.3 No.4,1975-4
- 「カール・ポパー——本質を廃棄した政治哲学」『現代の政治哲学者』内山秀夫/他訳、南窓社、1977
- クワート、クワトル 「ウィーン学団——論理実証主義の起源・現代哲学史への一章」寺中平治訳、勤草書房、1990
- クワイ、J. 「ハイエクの自由論」照屋佳男/古賀勝次郎訳、行人社、1985
- 熊谷 陽一 「ポパー哲学の広がり」『現代哲学のバックボーン』神野憲一郎編、勤草書房、1991
- 倉塚 平 「歴史法則と社会的実践——歴史法則をめぐるJ. ルイスとK. ポパーの見解についての覚書」『歴史学研究』No.239,1960-3
- 桑原 昭 「消極的功利主義——ポパーの公共政策論」『海技大学校研究報告』No.34,1991-3
- ケート、T. 「本質的緊張」(全2巻)我孫子誠也/佐野正博訳、みすず書房、1987-92
- 好田 順治 「ラカトシュの科学観」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学編』Vol.19 No.2,1983-3
- 河野 勝彦 「カール・ポパーの多世界論と唯物論」『現代と唯物論』No.8,1984、再録『デカルトと近代理性』文理閣、1986
- 古賀 勝次郎 『ハイエクと新自由主義——ハイエクの政治経済学研究』行人社、1983
- 小島三郎/シャントツ編 『経済科学と批判的合理主義』慶応通信、1988
- 小林 薫 「ポパーの社会科学の規則における矛盾——反証主義の要請と反証主義採用の禁止」『商学論叢』(日大)No.14/15,1990-5
- 小林 傳司 「ポパー『推測と反駁』」『現代科学論の名著』村上陽一郎編、中央公論社、中公新書、1989
- 小林傳司/中山伸樹/中島秀人編著 『科学の見直し叢書4 科学とは何だろうか——科学観の転換』木鐸社、1991
- コルトウエル、B.J. 『実証主義を越えて——20世紀経済学方法論』堀田一善/渡部直樹監訳、中央経済社、1989
- コンフォース、M. 『哲学の擁護』花田圭介訳、岩波書店、1953
- 近藤 重明 「K. ポパーとE. ゴンブリッチ——『シチュエーションの論理』と『ヴァニティフェアの論理』」『愛媛大学教育学部紀要・第二部人文・社会科学』No.19,1987-2
- 斎藤 隆 「K. ポパーにおける『カントの問題』」『精神科学』No.24,1985-5
- 「K. ポパーの初期検証理論批判」『精神科学』No.25,1986-7
- 「『批判主義』と形式論理学——カントとポパーにおける」『精神科学』No.26,1987-7
- 榎原研互/菊沢研宗 「批判的合理主義における合理主義原理の身分と役割」『三田商学研究』Vol.30 No.4,1987-10
- 座小田 豊 「社会科学における『客観性』の問題」『哲学の再構築』滝浦静雄編、南総社、1987
- 佐藤 和夫 「カール・ポパーの科学観をめぐる——コンフォース批判から(海外論調)」『季刊・科学と思想』No.19,1976-1
- 佐藤 敬三 「知識における構造的なもの——システム論の発展と批判的合理主義」『知の考古学』No.2,1975-5/6
- 佐藤 隆三 「最近の経済学方法論について」『経済学史学会年報』No.24,1986-11
- 「K. R. ポパーの社会科学方法論をめぐる」『近代経済理論の展開——芳賀半次郎教授退官記念論文集』大槻幹郎/佐々木公明/鴨池治編、木鐸社、1987
- 「テストの可能性と経済学方法論」『社会科学の方法』Vol.7 No.10,1974-10
- 「ラカトスのMSRPと経済学方法論・経済学史(上)(下)」『社会科学の方法』Vol.10 No.5,6,1977-5,6
- 佐野 正博 「科学の連続性と合理性」『科学哲学』No.20,1987
- 澤田 昭夫 「ハイエクとポパー——『自生的秩序』の諸相」『鹿児島女子短期大学紀要』No.20,1985-1
- 沢谷 豊 「E. トーピッチのイデオロギー批判に関する一考察」『三田哲学会』No.78,1984-4
- 狩積 茂 「『弁証法とは何か』におけるK・ポパーの弁証法批判」『科学哲学』No.3,1970-11
- 「マルクスの歴史観とポパーの批判」『科学哲学』No.4,1971
- 嶋津 格 「客観と主観 発見の論理と心理——ポパー理論の批判的検討に向けて」『自由と規範——法哲学の批判的展開』上原行雄/長尾龍一編、東京大学出版会、1985
- ツツ、G. 『経営経済学の課題と方法——批判的合理主義をめざして』榎原研互訳、同文館、1991
- 『現代経営学方法論』森川八洲男/風間信隆訳、白桃書房、1992
- シュレカー、E. 『現代哲学の根本問題6 科学哲学の根本問題』常俊宗三郎/西谷敬訳、晃洋書房、1977
- 白石 光男 「ポパーの演繹主義」『フィロソフィア』(早稲田)No.70,1982
- 城塚 登 「弁証法の再編成——アドルノーとポパーの対立をめぐる」『思想』No.518,1967-8

- 杉森 混一 「モデル的方法と反証主義——経済学の方法におけるポパー科学論の一側面」『岡山大学経済学会雑誌』
Vol.9 No.3,1978-3
- 鈴木 茂 『偶然と必然』有斐閣、1932
- 関 雅美 「ポパーの批判的合理主義的科学論 1, 2」『金沢大学教養部論集・人文科学編』 Vol.25 No.2,1988
Vol.26 No.1,1988
- 瀬在 良男 「歴史的分析と"Popper-Hempel Theory"」『科学哲学』No.3,1970-11
- 世良 晃志郎『歴史学方法論の諸問題』木鐸社、1983
- 「理念型的理論的構成と反証の問題」『社会科学の方法』Vol.6 No.4,1973-4
- 世良 晃志郎/丸山真男「《対談》歴史のディレンマ」『創文』No.200,1980-8/9
- ソルマン、G.『二十世紀を動かした思想家たち』秋山康男訳、新潮社、1990
- 高島 弘文 「ポパーの自然科学方法論」『京都府立大学学術報告(人文)』No.19,1967
- 「ポパー研究「哲学の可能性」——そのⅠ 序および第1章」『京都府立大学学術報告(人文)』No.20,
1968
- 「ポパー研究「哲学の可能性」——そのⅡ 第2章 科学の方法」『京都府立大学学術報告(人文)』No.
21,1969
- 「ポパー研究「哲学の可能性」——そのⅢ 第3章 哲学の方法」『京都府立大学学術報告(人文)』No.
22,1970
- 「ポパー研究「哲学の可能性」——そのⅣ 第4章 哲学の可能性」『京都府立大学学術報告(人文)』
No.23,1971
- 「ポパーのテスト理論に対するパトナムの批判をめぐって」『京都府立大学学術報告(人文)』No.30,19
78
- 「ニュートン理論は反証不可能か——ラカトス対ポパー」『哲学(日本哲学会)』No.31,1981-5
- 「ベーコンとポパー——知識の源泉と妥当性」『京都府立大学学術報告(人文)』No.32,1980
- 「『何でもかまわない』——ファイヤアーベントのポパー批判」『京都府立大学学術報告(人文)』No.3
6,1984
- 「科学に進歩はあるか?(前編)」『京都府立大学学術報告(人文)』No.38,1986
- 「科学に進歩はあるか?(中編)——ポパーの非累積的進歩観」『京都府立大学学術報告(人文)』No.40,
1988
- 「ポパー『真理らしさ』の理論について」『京都府立大学学術報告(人文)』No.41,1989
- 「ポパー哲学の意義について」『京都府立大学学術報告(人文)』No.42,1990
- 高橋 七五三「ポパーの方法論と経済学」『専修大学社会科学研究所月報』No.260,1985-3
- 高幣 秀和 「論争『社会科学の論理』に寄せて——フランク学派の方法と『批判的合理主義』」『現代の思想』No.12
4,1980-11
- 高山 淳司 「ポパーにおける境界設定の問題」『奈良大学紀要』No.10,1981-12
- 「ラカトシュと反証主義 1」『奈良大学紀要』No.12,1983-12
- 高柳 環 「ポパーにおける<普遍>について」『科学哲学』No.10,1977
- 伊達 功 「カール・ポパーの科学論——批判的合理主義の理論と特異性」『松山商大論集』Vol.32 No.5,1981-12
- 立花 希一 「K. ポパーの批判的方法について」『筑波大学哲学・思想論叢』No.2,1984
- 「ポパーと社会主義」『筑波大学哲学・思想論叢』No.3,1985-1
- 「ポパーの反証主義の背景としてのマイモニデスの否定神学」『社会思想史研究』No.11,1987
- 「民族主義の倫理的考察——K. R. ポパーの民族問題に関する発言を手掛かりと」『秋田大学教育学
部研究紀要・人文科学社会科学』No.38,1988-2
- 「境界設定と生活様式の問題」『秋田大学教育学部研究紀要・人文科学社会科学』No.39,1988-7
- 「カール・ポパーとキリスト教」『秋田大学教育学部研究紀要・人文科学社会科学』No.40,1989-3
- 「批判的合理主義とその展開」『秋田大学一般教養総合科目研究紀要・科学論Ⅰ』1989-3
- 「批判的合理主義と伝統」『秋田大学一般教養総合科目研究紀要・科学論Ⅱ』1990-7
- 田中 菊次 「経済学の理論と方法について——K.R.ポパーのマルクス批判を中心に」『経済学』(東北大)Vol.33 No.
3/4,1972-5

- 田辺 振太郎「K. R. ポッパーの認識論について」『思想』No.714,1983-12
 ターソワ、R. 『ユートピアからの脱出——ダーレンドルフ社会理論論集（上）』橋本和幸／他訳、ミネルヴァ書房、1975
 — 『価値と社会科学——ダーレンドルフ社会理論論集（下）』橋本和幸／他訳、ミネルヴァ書房、1976
 — 『ザ・ニューリバティ——ポスト「成長」の論理』加藤秀治郎訳、創世記、1978、改訳『現代文明にとって「自由」とは何か』TBSブリタニカ、1988
 — 『ヨーロッパ革命の考察』岡田舜平訳、時事通信社、1991
 丹沢 安治「ポパー学派の社会科学研究方法論における展開の検討」『市邨学園短期大学』No.30,1980-12
 フォルマス、A.F.『新版・科学論の展開』高田紀代志／他訳、恒星社厚生閣、1985
 辻 博「K. R. ポッパーの確率論——古典確率論の修正をめぐる」『経済学論叢』（同志社大）Vol.18 No.1/2/3,1969-1
 土屋 恵一郎『社会のレトリック——法のドラマトウギー』新曜社、1985
 土屋 盛茂「仮設評価の問題——ポッパーを中心として（1）（2）（3）」『香川大学教育学部研究報告第一部』No.45,1978-10, No.47,1979, No.48,1980
 — 「心は脳に置き換えられるか」『現代哲学のフロンティア』神野慧一郎編、勤草書房、1990
 筒井 清忠「『社会科学における客観性』の現段階——ウェーバーとポッパー」『思想』No.641,1977-11、再録『現代思想の社会史』木鐸社、1985
 角田 幸彦編『精神史としての哲学史』東信堂、1990
 富田 重夫「経済理論の検証について（再論）特にK. R. ポッパーに関連して」『三田学会雑誌』Vol.62 No.1,1969-1
 中尾 隆司「弁証法とは何か？ K・ポッパーのヘーゲル弁証批判」『神戸山手女子短期大学紀要』No.18,1975-12
 長岡 克行「ポッパー派の認識進歩の理論と経営経済学史——イエーレ批判」『東京経済学会誌』No.96,1976-7
 長尾 昭哉「因果性の分析におけるヒューム・ポッパー・サイモン」『近代経済理論の展開』井芳賀半次郎教授退官記念論文集』大槻幹郎／佐々木公明／鴨池治編、木鐸社、1987
 中才 敏郎「ポッパーにおける科学の合理性」『神・自然・人間』大阪市立大学文学部哲学研究室編、1987
 中沢 賢一「K. ポッパーの『方法論的个人主義』の主張と社会科教材構成」『東京大学教育学部紀要』No.25,1985
 永田 誠「経営経済学方法論と批判的合理主義」『大分大学経済論集』Vol.24 No.2/3/4,1972-12
 中村 清「ポッパーの批判的合理主義について」『宇都宮大学教養学部紀要第一部』No.25,1975-12
 — 「ポッパーの批判的二元論について」『宇都宮大学教養学部紀要第一部』No.26,1976-12
 — 「ポッパーの世界3の概念について」『宇都宮大学教養学部紀要第一部』No.36,1986-2
 — 「ポッパーにおける人間の自由の問題」『宇都宮大学教養学部紀要第一部』No.37,1987-2
 中村 秀吉『科学論の基礎——分析の方法とマルクス主義』青木書店、1970
 — 「唯物史観について」『社会科学の方法』Vol.4 No.9,1971-9
 — 「科学的理論の構造と検証」『岩波講座 哲学12 科学の方法』中村秀吉／他編、岩波書店、1968
 中村 行秀「カール・ポッパーの『推測と反駁の理論』」『千葉短期大学紀要』No.1,1975-12
 奈良 和重『理性と反抗——反時代的批判論集』酒井書店、1974
 — 「ポッパー対コンフォース——「開かれた社会」をめぐる友、敵関係」『法学研究』（慶大）Vol.44 No.10,1971-10
 — 「歴史予測と社会的実践の科学法について」『法学研究』（慶大）Vol.33 No.2,1960-2
 — 「カール・ポッパーの『社会科学の論理』」『法学研究』（慶大）Vol.60 No.1,1987-1
 — 「カール・ポッパーとブライアン・マギーとの思想的対話」『法学研究』（慶大）Vol.47 No.2,1974-2
 西勝 忠男「帰納問題に関する一考察——ポッパーとバースをめぐる」『埼玉大学紀要（人文科学編）』No.11,1962
 西谷 敬「方法論的个人主義の基礎——ポッパーとウェーバーにおける社会理論の基礎付け(1)(2)(3)」『神戸女学院大学論集』Vol.25 No.3,1979-3, Vol.26 No.2,1979-12, Vol.27 No.2,1980-12
 西山 千明「新自由主義の思想——ハイエク、ポッパー、オイケン、フリードマン」『経済政策論』尾上久雄／新野幸次郎編、有斐閣、1975
 野家 啓一「K. ポッパー／J. エクルズ：自我と脳」『科学』Vol.57 No.10,1987-10
 野田 欣孝「ポッパーの「歴史主義的貧困」に就いて」『関西学院大学研究報告』No.1,1960-10
 鉢野 正樹「カール・ポッパーの経済学方法論」『北陸大学紀要』No.9,1985
 花田 圭介「ワールブルク研究所とK.ポッパー」『知の考古学』No.3,1975-7/8

- 浜井 修 『社会哲学の方法と精神』以文社、1975
 — 『ウェバーの社会哲学』東京大学出版会、1982
 — 「批判的合理主義の倫理学」『現代倫理学と分析哲学』、日本倫理学会編、以文社、1980
 — 「批判的合理主義の科学論」『社会学講座 第11巻・知識社会学』徳永恂編、東京大学出版会、1976
 — 「カール・ポパーの客観的知識論」『社会科学の方法』Vol.8 No.10,1975-10
 — 「理論・経験・実践——いわゆる『実証主義論争』について」『社会科学の方法』Vol.6 No.11,1973-11
 ハーラー、W.W. 『ポパー哲学の挑戦』小河原誠編訳、未来社、1986
 ハーナス、J. 『理論と実践』細谷貞雄訳、未来社、1975
 ハー、N.P. 『ハイエクの社会・経済哲学』矢島鈞次訳、春秋社、1984
 ヒューケル 『科学的理性批判』神野憲一郎/中才敏郎/熊谷陽一訳、法政大学出版局、1992
 ハイアーズ、P.K. 『方法への挑戦——科学的創造と知のアナキズム』村上陽一郎/渡部博訳、新曜社、1981
 — 『自由人のための知——科学論の解体へ』村上陽一郎/村上公子訳、新曜社、1982
 — 『理性よ、さらば』植木哲也訳、法政大学出版局、1992
 ヒューソン 『経済学方法論の新展開——方法論と経済学』浦上博達/他訳、文化書房博文社、1991
 深谷 庄一 「科学法論序説 1——『反証可能性』の理論とその有効性」『防衛大学校紀要』No.46,1983-3
 — 「『歴史主義』を論破する証明に関するノート」『科学哲学』No.5,1973
 藤井 千春 「現代科学哲学における『理論転換』をめぐる論争——ポパーとクーンの科学論の比較・検討」『大阪府立大学紀要(人文・社会理論)』No.39,1991
 ガー、R. 『弁証法と科学』加藤尚武/他訳、未来社、フィロソフィア双書、1983
 ガウス、H.I. 『科学論序説——新パラダイムへのアプローチへ』野家啓一/他訳、培風館、1985
 ガー、D. 『数学の社会学——知識と社会表象』佐々木力/他訳、培風館、1985
 ガム、ロバート、ヘンリッヒ 『社会科学の科学——批判的合理主義によせて』金子光男訳、多賀書店、1987
 Perutz, Max F. 『科学はいま』有馬一郎訳、共立出版、1991
 堀越 比呂志 「ラカトシュの方法論的主張に関する批判的考察」『青山経営論集』Vol.22 No.2/3,1987-11
 本間 脩郎 「科学認識と弁証法——ポパーの所論をめぐって」『社会科学の方法』Vol.2 No.7,1969-7
 本間 司 「科学哲学における内在的批判——K. R. ポパーの批判的合理主義における方法と理念」『精神科学』No.17,1978-5
 松永 俊男 「カール・ポパーの進化論」『生物科学』Vol.35 No.2,1983-5
 松原 隆一郎 「ローレンツ・ポパー・ハイエク」『木鐸』No.32,1986
 マートン、R.K. 『社会科学の歩み——エピソードで綴る回想録』成定薫訳、サイエンス社、1983
 馬渡 尚憲 『経済学のメソドロジー——スミスからフリードマンまで』日本評論社、1990
 水波 朗 「<書評>カール・ポパー『開いた社会とその適 第一巻 プラトンの呪文』」『法政研究』Vol.34 No.2,1968-3
 光木 保臣 「K. ポパーの歴史哲学」『立正大学哲学・心理学会紀要』No.6/7,1980
 宮地 正卓 「科学的認識における帰納的推論——ポパーとライヘンバッハの対立をめぐって(1)(2)(3)」『親和女子大学研究論叢』No.20,1986-11, No.21,1988-2, No.22,1989-2
 モドワース、N. 「開かれた社会——ハイエクV.S ポパー」『現代思想』Vol.19 No.2,1991-12
 森 博 「社会学における科学主義と<歴史主義>」『東北大学教養部紀要』No.2,1965-3
 — 「ポパー私見——高島弘文著『カール・ポパーの哲学』を評す」『社会科学の方法』Vol.7 No.7,1974-7
 — 「社会主義の科学的基礎」『科学と社会主義』Vol.1,1976
 矢島杜夫 『J. S. ミルの社会哲学』創論社、1982
 家名田 克男 「'historicism'に関する1つの覚書」『香川大学経済論叢』Vol.43 No.1/2/3,1970-8
 矢野 暢 「カール・ポパーとヒューマンイズム——原点に立ち帰る思想」『読売新聞』1989-8-22 夕刊
 山本 鎮雄 「『実証主義論争』再考」『日本女子大学紀要文学部』No.38,1988
 山本 晴義 「『新保守主義』について——3——ハイエクとポパー」『大阪経大論集』Vol.42 No.5,1992-3
 横田 栄一 『市民的公共性の理念——カト/ハイアーズ/アベリ/ハーナス』育弓社、1986
 横地 房彦 「社会科学における方法の問題——K. ポパーの哲学について」『高千穂論叢』Vol.49 No.1,1975-2
 吉沢 昌恭 「自由社会の哲学(1)(2)」『広島経済大学経済研究論集』Vol.9 No.1,1986-6, Vol.9 No.2,1986-9

- 「方法論的唯名論と仮設・演繹的方法」『広島経済大学経済研究論集』Vol.9 No.3,1986-12
- 「帰納と合理性」『広島経済大学経済研究論集』Vol.11 No.1,1988-6
- 「カール・ポパーの哲学——科学哲学と社会哲学」『イギリス哲学研究』No.10,1987
- 「Hayek and Popper—a Spontaneous Order and the Open Society」『広島経済大学経済研究論集』Vol.14 No.3,1991-9
- 吉田 和男 「カール・ポパーと経済学方法論について」『経済論叢』Vol.145 No.3,1990-3
- ラカツ、I. 『数学的発見の論理』佐々木力訳、共立出版、1980
- 『方法の擁護——科学的研究プログラムの方法論』村上陽一郎/他訳、新曜社、1986
- ラカツ、I./ マスグ、A. 編『批判と知識の成長』森博監訳、木鐸社、1985
- ラコフ、A. 「記号論の歴史——マルクス主義的アプローチ」『現代思想』Vol.14 No.12,1986-11
- ラフェ、H./アベ、B. 『現代科学理論と経済学・経営学方法論』小島三郎監訳、税務経理協会、1982
- リチャーズ、S. 『科学・哲学・社会』岩坪紹夫訳、紀伊国屋書店、1985
- 柳父 罔近 「ウェーバーとポパー——科学観の交錯と現代」『歴史と社会』No.4,1984-6
- カイス、J. 『マルクス主義と偏見なき精神』真下信一/他訳、岩波書店、1958
- リュウ、G. 他編『批判的合理主義と民主社会主義』（部分訳）『科学と社会主義』Vol.1-4,1976-1980
- レイソフ、A. 「ケインズ経済学に一体何が起きたのか？」『東洋経済』No.4726,1987-5-22 日号
- ローゼン、B. 「組織・競争・知識の成長」『プロセスとネットワーク——知識・技術・経済制度』今井賢一編、NTT出版、1989
- ローグ、L. 「科学は合理的に進歩する——脱パラダイム論へ向けて」村上陽一郎/井山弘幸訳、サイエンス社、1986
- ワトソン、J.W.N. 「ポパー：その思考と統一」『大哲学者の根本問題【現代1】』J.シバク編、針生清人監訳、富士書店、1982
- 『科学と懐疑論』中才敏郎訳、法政大学出版局、1992



ポパー・レター（通巻7号1992年11月発行）
 発行人 碧海純一
 発行 日本ポパー哲学研究会 事務局
 〒180 東京都港区三田 2-15-45
 慶応義塾大学法学部 萩原研究室
 TEL 03-3453-4511ex3314 FAX 03-3798-7480
 編集部 〒263 千葉市稲毛区弥生町 1-33
 千葉大学法経学部 嶋津研究室
 TEL 043-251-1111ex3605 FAX 043-254-0497

運営委員会議事録

(1992年6月26日 18:30～21:00 および

1992年6月27日 12:00～13:00

於 東大駒場 2号館 308号室)

出席者：6月26日：碧海、上原、小林、
小河原、嶋津、西脇、
萩原、濱井、堀越、山脇
渡部

6月27日：碧海、上原、小林、
小河原、坂木、嶋津、
立花、西脇、萩原、濱井
堀越、山脇

議事

1. 1991年度活動報告および会計報告

堀越委員より昨年の第2回年次研究大会、
会費納入状況などの経過報告と1991年度の
会計報告があり、承認された。なお監事につ
いては香取氏と山脇氏にお願いすること
になった。

2. 新入会員者と退会者の承認および住所等 の変更者について

別紙の通り報告され承認された。

3. 新役員リストの作成

以下の案が出され、会員総会の議事にかけ
ることとなった。

1992, 1993 年度運営委員(案)

◎碧海順一(関東学院大学) 上原行雄(一
橋大学) 小林傳司(南山大学) 小河原誠
(鹿児島大学) 坂木百大(青山学院大学)
○嶋津 格(千葉大学) 立花希一(秋田大
学) ○丹沢安治(専修大学) ○冨塚嘉一
(中央大学) 西脇与作(慶応義塾大学)

△萩原能久(慶応義塾大学) 濱井 修(東
京大学) 堀越比呂志(青山学院大学) 森
博(甲南女子大学) 谷嶋喬四郎(桜美林大
学) 山脇直司(東京大学) ○渡部直樹(
慶応義塾大学)

(◎は代表、○は事務局、△は事務局本部)

4. 来年度年次研究大会におけるシンポジウム ・テーマおよび開催場所の決定

運営委員会案として仮題「社会科学にお
けるポパー哲学の応用可能性」があげられ
た。また開催場所としては、専修大学で行
なえないかどうか丹沢氏に打診することにな
った。

5. 新入会員者承認の方法について

新入会員者承認の迅速簡便化を計るため
「入会申込書を出し、専任講師以上および
それと同等の資格をもつ入会希望者につ
いては、運営委員会が可否の判定を代表者に
委任し、結果を運営委員会で報告する」と
いう申し合わせ事項が決議された。

6. ポパー・レターの定価について

ポパー・レター請求者に対しては、以下
のような実費で配布することとなった。

15円× ページ数で10ケタ以下四捨五入

以上
(事務局)

会員総会報告

6月27日 11:00～12:00 に行われた会員総
会における承認事項について報告致します。

1. 1991年度活動報告および会計報告

ポパーレター vol.3 No.2の発行、第2回
年次大研究大会の開催等について報告があっ
た後、会計報告および監査報告（別掲）があ
り承認された。

2. 新入会者と退会者の承認

運営委員会承認案通り承認された。

3. 新役員の決定

運営委員会案が承認された。

4. 来年度年次研究大会におけるシンポジウム
・テーマについて

運営委員会案「社会科学におけるポパー
哲学の応用可能性」が承認された。

以上
(事務局)

1991年度会計報告

(1991年 4月 1日から1992年 3月31日まで)

(単位：円)

収 入	金 額	支 出	金 額
前年度繰越金	167,677	事務用消耗品費	5,405
会費 90'(12人分)	36,000	通信費	27,311
91'(40人分)	120,000	役務費	6,000
寄附	5,000	払込料金	1,620
第2回大会参加費(24人分)	24,000	第2回大会懇親会食事代	97,800
第2回大会懇親会費(13人分)	65,000	第2回大会雑費	6,157
レター売上げ	1,800	レター(Vol3-1,2)作成郵送費	33,358
		次年度繰越金	241,826
	419,477		419,477

1992年 6月26日

日本ポパー哲学研究会

事務局本部 堀越比呂志



以上 相違ありません。

監事
監事

山脇 直司
香取 徹



新入会者・退会者および住所等変更者

〈新入会者〉

古田 亮 〒135 東京都江東区白河4-9-13-906 自 03(3643)2442
東京芸術大学美術部大学院 勤 03(3828)6111
専攻：日本近代美術史（美術史学方法論）

井上一夫 〒174 東京都板橋区若木1-3-5 自 03(3932)4308
NTT東京ネットワークセンター 勤 03(3231)9061
専攻：自由主義思想史

坂本百大 〒153 東京都目黒区東山1-21-16-202 自 03(3710)7207
青山学院大学 勤 03(3409)8111
専攻：哲学

名和田是彦 〒236 横浜市金沢区高舟台1-23-22 自 045(782)1653
東京都立大学
専攻：法哲学

〈退会者〉

大屋忠明 退会理由：一身上の都合のため

〈住所等変更者〉

碧海純一 関東学院大学

朝倉和俊 〒228 座間市緑ヶ丘3-30-54 自 0462(51)6918
相武台コート203
中央大学

香取 徹 〒225 横浜市緑区美しが丘4-25-7-202 自 045(902)0584
独協大学 勤 0489(42)1111

菊沢研宗 〒239 横須賀市走水2-25II-304 自 0468(42)6345

鳴津 格 千葉大学 勤 043(251)1111
ex 3605
Fax 043(254)0497